

目 次

| | |
|--|--------------------------------------|
| ガンディー&ロランの存在から今の世界を読み解く — 宗教学者、山折哲雄先生に聞く | 構成・聞き手 山折哲雄 1 |
| ロマン・ロラン生誕一五〇年 財団法人設立四五年記念コンサート 箏とギター、ヴァイオリンとチェンバロで聴くベートーヴェン 記念コンサートに寄せて | 西成勝好 32 |
| ロマン・ロランとベートーヴェン | 清原章夫 33 |
| 演奏曲目について | 西垣正信、清原章夫 35 |
| ロマン・ロラン研究所設立四五周年に寄せて | マルティニス・リエジョワ シッシュユ 由紀子 訳 43 |
| ロマン・ロランとベートーヴェン ベートーヴェン百年祭前後の献辞 | 植松晃一 46 |
| 父のこと | 森本素世子 50 |

ロマン・ロラン研究所便り

短信 53

追悼 55

研究所設立趣意書 56

研究所の活動 57

二〇一六年度 賛助会員、寄付者名簿 65

寄贈図書 66

読書会報告 66

編集後記 67

フランス語原文 1

ガンディー&ロランの存在から今の世界を読み解く

— 宗教学者、山折哲雄先生に聞く

山折 哲雄

構成・聞き手 濱田 陽

はじめに

ヒンドゥーとイスラム等、複数宗教の協力によって、そして、性の限界を乗り越えて母性を追求し、非暴力を編み出したガンディーと、フランス人でありながらドイツ人音楽家を主人公に『ジャン・クリストフ』（一九〇三―二二年）、男性でありながら女性の魂の成長物語『魅せられたる魂』（一九二一―三三年）を造形したノーベル賞作家ロマン・ロラン。二人の対話を今日の混沌化する世界に照らし合わせれば、どのような光景が浮かび上がってくるか。『母なるガンディー』（二〇一三年）を世に問うた碩学、山折哲雄氏とともに日本とフランス、インド、アメリカ、中国、韓国など多元的な国際関係に目を向けつつ、非暴力的な文化の行方に深く考えをめぐらせてみたい。

ロランは伝記『マハトマ・ガンジー』（一九三三年）を執筆し、ガンディーの思想と行動の本質をいち早くヨーロッパ世界に紹介した。それに対するガンディーの反応に注目しよう。

おどろくべきことは（中略）、異なった、遠い雰囲気の中にあなだが生活されながら、私の使命を多くの真理をこめて解釈することに成功されたことです。それは人間性が、相異なる大空のもとに花咲きながらも、本質的



2016年10月29日 アンステイチュ・フランセ関西にて

に単一^{ユニテ}であることをいつそうよく証明するものであります。

(ガンディーからロランへの手紙、一九二四年三月二二日付、

『ロマン・ロラン全集三二』五六頁)

ガンディーはロランとの会見を強く希望し、一九三一年一二月六日(日)〜一日(金)、一週間近くに及ぶ対話と交流がスイスのレマン湖畔で実現した。

ロラン、ガンディーの存在と戦中、戦後の知的状況

—— 山折哲雄先生につきましてはご紹介申し上げるまでもないですが、ロマン・ロラン生誕一五〇年、ロマン・ロラン研究所設立四五年の記念のビッグイベントに、ガンディーとロランというテーマについて、お考えになっておられること、心に秘めておられることを第一におたずねしてみたい方です。

国際日本文化研究センター所長などを歴任され、日本を代表する宗教学、碩学の先生でいらっしゃいます。そういうかたい面からのご紹介も可能ですが、縁あって先生に接する機会があった私は、先生の学生でもあったのですが、そういう

立場から、とても魅力的な、次にどんな言葉が出て来るのかがほんとうにわからない、ドキドキさせられる、また、お姿からどこかガンディーをしのばせるような(笑)、お顔が似ているところがある、そういう先生でいらっしやいます。

今日はどんなお話が飛び出すか私自身楽しみにしています。みなさまとご一緒に、真剣に、しかし楽しく、遊びごころを持ちながら記念の会を始めていきたいと思えます。

あと一点、先生は高校生のときに『ジャン・クリストフ』『魅せられたる魂』を愛読されたとのこと。『魅せられたる魂』はロマン・ロラン研究所を設立された宮本正清先生が訳されたのですが、それを友人と一緒に議論しながら読まれたとのことで、今回の依頼を受けた際、そのときのことか新しくよみがえってきたと話しておられました。今、遊びごころでと申し上げましたが、とても緊張しております(笑)。

ガンディー、ロランというだけでもそうですが、山折先生をお迎えして私にその役がはたして務まるだろうか。それでも、今日のタイトルは「ガンディー&ロランの存在から」となっています。言葉だけでなく、その後にあるものを含めて感じたいと思います。また、山折先生のなかから出てくるガンディーやロランの姿をぜひ拝聴したいと思っています。先生がどのようにガンディー、ロランの存在を受けとめて、先生の身体言語を通じて、どのような世界が見えてくるのか。

先生は『母なるガンディー』という画期的なガンディー論を数年前におまとめになりました。それから今回の講演会に際しましてロランとガンディーの一九三一年一二月のほぼ一週間に及ぶ会談記録にも目を通されました。最初はロラン、ガンディーの交流から先生が感じにられたこと、ご関心が呼び覚まされたところを自由なかたちでお話しただけだと思います。

山折哲雄 それでは最初に自己紹介めいたことを申し上げます。小学校を私は東京で過ご

しました。小学校一年から五年までは東京です。最初は世田谷の松原というところですが、後半は墨田区、国技館の近くでした。双葉山が七〇連勝を安藝ノ海に破られた、あの相撲を親爺と一緒に見ております。墨田区の小学校時代に学芸会がございました。日本神話のスサノオノミコトがヤマタノオロチを退治する場面に、お前出ると言われて、ちよつと胸が早鳴ったのですが、お前の役割はヤマタノオロチのしっぽだと(笑)。これはいまだに残っています。しかもそれが斬られる場所が尻尾なのです(笑)。切られる与三郎体験を小学生でいたしました。

ところがどういうわけか、同級生たちが私をいじめてか冷やかしてか、ガンディーというあだ名をつけてくれたのです(笑)。ちよつど今、濱田さんが言ったからはじめて告白いたします(笑)。それはなぜかというのは、彼が明察されたとおり、姿、形が似たのでしょね、おそらく。私は当時から眼鏡をかけておりました。まん丸いメガネ、これはガンディーと一緒にのようなメガネ。顔色が浅黒いということもあつたでしょう。やせ型であつたということもあつたでしょう。自分で見ても、そうか、ガンディーに似ているなど思つて(笑)、半分反発しながら半分納得しておりました。それがすり込まれたのかもしれませんが。トラウマになつたのかもしれませんが(笑)。

そして、戦争が激化してまいりまして、東京大空襲の直前、父親だけを東京に残して私は母親ときょうだいと一緒にふるさと岩手県の花巻に疎開しました。浄土真宗西本願寺派のお寺です。すぐそばに宮沢賢治さんの生家がありました。両親とも多少の交流がありました。そういうことがあつて宮沢賢治の作品とその人柄にずっと今日まで学び続けてまいりました。ですから、私の子供の頃の東京におけるガンディー体験と花巻における宮沢賢治体験というものが、のちのガンディーに対する関心、それからロマン・ロランに対しての関心とどこかで結びついているような気がいたします。

今思い出しますとロマン・ロランを読んだのは高校生、新制度になってからですが、『ジャン・クリストフ』と『魅せられたる魂』は友人たちとほとんど共同読書会のようなものをつくつて議論しながら読んだ記憶がございます。口

マン・ロランの思想の特色についてはその後、だんだん知るようになるのですが、ロシア革命を経て新しいソ連の社会主義体制というものができて、これを非常に高く評価しているわけですよ、ロマン・ロランは。日本の戦後の知識人が一時期、やっぱりソ連のあの革命後の社会のあり方を深い誤解をも含めて高く評価したということと連関するということ、だんだん、そんなに深く考えたわけではありませんけれども、今回、濱田さんに誘われて特にガンディーとの交流の日記を読んでいく過程で、ああそうだったのかと思いました。かなり当時のソ連型の社会主義の理想主義に傾倒していたロランという感じがありました。

私はその後、ロランの作品を読むことからやがてマルクス・ボーイになり、青年共産主義運動に比較的熱心に参加するようになりました。大学にいたるまで中途半端な生半可なものではありませんけれど共産主義の世界にそこがれのまなざしを向けるようになりました。それが一点ですね。のちに私がそういう方向にいたった機縁になったのも、もしかするとロマン・ロランだったかなと思います。戦後の社会主義運動、共産主義運動、日本人の当時の若者たちの魂の成長過程に、もしかするとロマン・ロランの思想、書物が大きな影響を与えているのではないかということを感じたしております。

それから、もう一つは浄土真宗のお寺に生まれましたから、これも小学生の頃から親鸞のことを徹底的に叩き込まれて、やはり戦後、新しい民主主義、そういうものに開かれて、それまでの親鸞研究のなかでも、左翼的な親鸞研究ばかりを読むようになりました。ものすごい数の親鸞研究があったわけですが、その最左翼の親鸞研究の傑作が服部之総はっとりしそうの『親鸞ノート』。マルクス主義の立場から見た親鸞、これを同時に読んでいましたね。その親鸞の思想のなかで一番私に関心をもったのが、当時の方はそうだと思うのですが、悪の問題、人間悪、それは『歎異抄』のなかに出てまいります、「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」。悪人こそが救われるというあの一文に徹底的な影響を受けました。

服部之総（東京大学の社会学科を出て、この人も浄土真宗のご出身で、明治維新史の傑作を書いています）その人の親鸞研究をいまだに私は高く評価しています。その親鸞研究を通して、日本人と悪の問題とはいったい何だろうということ（を今日までずっと考え続けております。悪の問題に對して、それでは日本の思想史の伝統のなかでだれがどこでどのように研究していたのかということと同時に並行的に考えておきますと、これがほとんど皆無なのです。たとえば、西田幾多郎。『善の研究』から出発した日本を代表する哲学者、その西田幾多郎が最終的にいったところが無、絶対無、絶対矛盾の自己同一の無という世界でした。鈴木大拙も無でした。悪の問題から出発した親鸞の思想的継承者は他にいない、善悪の問題は常に無にいつてしまふ。それはなぜだという問題が一つあります。そういう問題意識からしだいに東洋思想の原点とはいったい何だろうかということに関心が向くようになりました。それでガンディーが前面に現れてきたということでございます。

しかし、なかなか、ガンディーとロマン・ロランを同じ土俵で考えるというところまで、ずっと今日までいかなかったのです。濱田さんに少しこれ（ロランの日記）を読めということをいわれました。第一次大戦と第二次大戦との間に戦争の残酷性、悪魔性、罪悪性という問題が明らかになって、そのときヨーロッパの知識人がどういう反応を示すのか。これは普通の常識でしか考えていなかったのですが、たとえば、トルストイ、ヤスパース、ハイデッガー、そしてロマン・ロラン。さらに東洋ではガンディー。こういう知識人が、あの両大戦間の時期に、国を超えて戦争悪を否定して平和の世界をどう実現するかということに共通の関心を持った。さらにトインビーがおりますね。シュペングラーの西洋文明はもう限界に來たという主張も重なっている。そういう世界全体の変化、運動のなかで、だんだんにロマン・ロランとガンディーが話し合い、友情を確かめ合い、交流をするようになったという、そういうことがだんだんわかるようになってきたと思っております。その契機をつくってくれたのが濱田さんです。そういう関係です。

非暴力の探求による性、国家の限界の乗り越え

——先生から子供の頃、蛇にさせられたということは聞いていたのですが、それがまさかヤマタノオロチの尻尾で（笑）、切られる役だったとは今うかがって仰天しました。私から拝見しますと輝かしいばかりのご活躍をされてきて、今もまさに最先端の自然科学者や政治家、芸能、古典芸能等、様々な世界の方々と対談もなさり、ご活躍されている先生ですけれども、しかし自分はいろいろいじめられてきた、自分の人生はいじめと向き合うような過程を歩んできたところがある、そういうふうにもおっしゃっておられます。

考えてみるとガンディーもそうです。それからロマン・ロランも精神の独立の声を発したがために母国フランスはもとよりドイツからも様々な知識人に批判され、そして、スイスの地に居を定めるにいたるわけです。間に立とうとする人間は言いにくいことをあえて口に言葉にする必要が出てまいりますし、また、限界を乗り越えたいという知的好奇心といえますか、欲望を駆り立てられるということもございます。

山折先生も多方面にわたって私たちが驚くようなご発想をなさり、橋が架からないようなテーマについて間を取り持とうと努力されていらつしやるようにお見受けしますけれども、そういう非常に困難なところで橋を架ける、あるいは自分自身の立場が危うくなっても、微妙ですけれども何か一歩、発想や言葉を与えて思考を進めようとする。そういうことについて日ごろお考えになられていること、ガンディー、ロランを通して、先生が今回あらためてお感じになられていることをぜひうかがってみたいと思います。

山折 先ほど、戦争の暴力、戦争の罪悪性ということを考えていくと、やっぱり暴力というのはいつたどこから来るのかな、と。

そう考えると、私には、もうすでに暴力の源泉は男性性と不可分ではないのか、と思えるのです。これははじめから埋め込まれております。暴力的な女性はたくさんおいでになるのですが（笑）。暴力性の根源はやっぱり男性と不可

分に結びついていて、そう私に思わせたのはですね、ガンディー自身が言っているのですよね。彼が非暴力、無抵抗の運動を通してインドの独立を勝ち取って、そのために暗殺されるわけですが、暗殺される直前の段階で遺言のように言っているのですね。自分のいつている非暴力というのは、これから女性によって受け継がれてほしい、女性によって受け継がれて初めてこれは世界に広がっていくであろうという、こういう謎のようなことを言っているのです。

で、そう言われてみると、ガンディーのその非暴力というものが産み出されるプロセスのなかで、彼が二つの重要な実験をやっていたということに気がつきました。

一つは男性でありながら女性になろうとする実験であります。ほとんど無謀とも思えるような実験です。具体的にどういうことかといいますと、これは『母なるガンディー』という本を紹介していただきましたが、第二次世界大戦が終わる直前、ガンディーご夫婦はイギリスによって投獄されております。同じ獄舎でご夫婦で生活するようなかたちで投獄されています、ここがイギリスのすごいところですね。日本の思想犯をそういう投獄の仕方です、これは日本はできなかった。やっぱりイギリスには、この点はかなわんということを思いました。

それで、その二人の世話をするサポーターというか、これもゆるされて三人で共同生活をした。そのなかで奥さんが病気になるって死ぬのですね。イギリス側は近代的な療法で治療しようとするのですが、その一切をガンディーが拒否する。そしてインド伝来の土着の療法で治そうとする。そのために死を早めたということもあるでしょう、あるいは決定的にそのために死んでしまったということもあるかもしれない。それで亡くなるのですよ、獄中で独立を目前にして。そのとき、夫のガンディーに遺言するのですね。ここにいてわれわれ二人を獄中で世話してくれたマヌという娘なのですが、奥さんの又姪またひい（甥姪の子供 *grandniece*）にあたるのです。まだ一四、五歳の少女でした。

そのマヌを、自分が死んだ後、母親がわりになって育ててくれ、これがガンディーに対する遺言であった。その後、

解放されて出獄する。出獄と同時にガンディーはインドとパキスタンの、あの血で血を洗う争いのなかに投げ込まれる。そしてインド・パキスタン独立の直前はカシミール、ボンベイ、カルカッタ、あの周辺のもっとも宗派的な争いが激しいところに入っていつて毎日のように平和行脚をし、説得するのですね。これがうまく効あらずして最後は暗殺されてしまうのです。

平和行脚の旅にいつもついてるのが、奥さんから頼まれた又姪のマヌ。その、少女の教育です。母親がわりというのですから、何から何まで母親として教育をするわけですが、毎日、夜眠るとき、ベッドを一つにして寝る。母親が娘を育てる、愛育するため一緒にベッドで休むと、それをその通り彼はやろうとした。で、そのことを自らの機関誌『ヤング・インドア』に公表するのです。これはほとんど全インドのスクャンダルに発展していくわけです。ガンディーは母親として、娘とともに夜を同じベッドに寝るということをやっているだけであって、それは母親として育むためには欠かすことができないという信念なのです。(弟子が)一人去り、二人去りして結局孤独なガンディーがそこで平和運動に献身する。その献身の姿を娘はじつと見つめて、それで育てられていく。

こういうことがあったのです。これはなるほど自分の非暴力というのはいまズェンダーを超える。これができないかが暴力から非暴力の世界へ乗り越えていくためには欠かすことのできない問題だと。しかもそれは自分を生かした実験としてやる。これを理解する人はほとんどいなかったと思いますね。この実験の意味を。やがてガンディーは暗殺される。

又姪はこうした非暴力の運動のなかで成長していく。そして十年か十数年たったときに自分の大おじにあたるガンディーとの生活を赤裸々に告白する自伝を書くのです。これも衝撃的な事件だったのですが、その自伝のタイトルが『バプー、マイ・マザー』(Bapu My Mother. Manubehn Gandhi)。バプーというのは父親に対する愛称であります。「ガンディーおじさん、わが母」「わが母、ガンディーおじさん」とでも訳するんですね、直訳すると。奇妙なタイトルです。

その『バプー、マイ・マザー』、この小冊子を私はなんとか日本で翻訳しようと思っただけで、どこも翻訳してくれるところはありませんでした。放送局でこの話にふれたとき、それは危ないテーマだよと言われる。こま切れに話はしましたけれども、なかなかストリートに話はできない状況でございました。これを私は、まず性を越えることができるかできないかが非暴力という考え方をほんとうに鍛えるか鍛えないかの分水嶺になると、ガンディーはそう考えていたのだらうと思います。性を越えることと同時に母親にならうとした。『バプー、マイ・マザー』はそういう世界をみていた。

性を越えるという事で、いまこのガンディー晩年の例をあげましたが、じつはちょっと順序を間違えました。

ガンディーは若くしてイギリスに留学してロンドンの法学院で弁護士資格を取る、三年留学をする。このときはハイカラで完全にイギリス紳士の猿真似をして勉強して、それでインドに帰ってきました。するとインドは、イギリスの支配下にありますからインド国内で弁護士になる職は一つもありませんでした。それで彼は仕方なしにイギリスの植民地である南アフリカに行くわけです。南アフリカでは差別されたインド人が劣悪な条件下で労働に従事していました。そういう同胞たちの弁護のために南アフリカに行くわけです。南アフリカはアバルトヘイトで非常に有名な国でした。そこでさんざん差別、抑圧に出会って、反対運動を起こすのです。このときに非暴力による抵抗運動を展開する。相手はイギリスの圧倒的な暴力。このときに初めて彼は、非暴力でどれだけの力が発揮できるのかどうかの実験をした。

そのとき、政治運動としての非暴力運動だけでは非暴力は筋金が入らない。そのために自分と奥さん、その夫婦の関係を絶つ、性的な関係を絶つ。これを宣言してそれを機関紙にそのまま発表する。これも衝撃的なことでした。これからは、あなたと自分は夫婦の関係ではない。同じ非暴力運動に従事する同志の関係だと一方的に宣言する。非暴力のためのものではあるけれども、これほど奥さんに対して心理的暴力をふるう宣言はないわけです、一方的な。こ

れがガンディーの非暴力思想の矛盾といえますか、なかなか世界化していかない。世界で内面的に受容されない最大の原因ですね。このときに彼はやはり非暴力のためにまず性、ジェンダー、この問題に立ちいたったわけです。それから晩年になって暗殺される直前には母親にまでなろうとする。これができるかできないのかという問題です。

で、その問題、二つの実験をしながら今度はインドがいよいよ独立するいうときに、インドとパキスタンが宗教のイスラム教とヒンズー教のそれぞれの宗教エゴにもとづいて譲らない。結局、それぞれの国をつくるというかたちでインドは独立することになる。そのときガンディーはこう言うんですよ。この大きなわれわれの民族というものが二つの国家に分かれて独立するくらいならば国はいらない。そして、政治からいっさい手を引いてしまふ。後を受け継いだのがネルーさんです。彼が独立後の最初の首相になる。このときネルーとガンディーの間は真つ二つに分かれる。意見が対立する。意見は対立するけれど最後までネルーはやっぱり、「父」ガンディーを否定することはできなかった。いぜんとしてヒンズー教とイスラム教の宗教対立を融和させるための精神的武器は非暴力をおいてないわけですから。今日までその問題が続いていると思います。私は二つの性の乗り越え、国家の乗り越え、これらが実現しない限り、世界から暴力、戦争はなくならないだろうという、これがガンディーの見取り図だったと考えるようになりました。

この問題についてロマン・ロランがどう対応したかというのは、じつは大きな面白い問題だったわけですが、あまり私はそこを根を詰めて読んできたわけではありません。今度、スイスでロマン・ロランとガンディーが対談をした記録が、ロマン・ロランの日記のなかに詳しく綴られているのを読みました。そのなかで暴力の問題が出てきます。結論だけ言ってしまうと、私の読み方が浅いのかも足りないのかも知れませんが、ロマン・ロランはソ連社会主義の成立を理想主義的な観点から評価しているわけです。あのロシア革命というものはまさに暴力によって成就した。ガンディー式の非暴力の立場に立ちまして、暴力を一方向的に批判するとロシア革命そのものの基盤を批判す

ることにつながる。ですからロマン・ロランは日記のなかでは暴力か非暴力かという問題、その間を揺れているように私は思いました。これは難しいのですが、その問題をおそらくロマン・ロランはガンディーから聞いたかっただろうと思いますね。

非暴力の有効性が世界史的なレベルにおいてどこまでか疑問を持っていたわけですが、そして、それ以後のヨーロッパの知識人はみんなその点で疑問を持ち続けてきているわけです。それを象徴的に示すのがユダヤ系のドイツ出身の政治哲学者、政治思想家ハンナ・アーレントの『暴力について』、あの画期的な論文です。アーレントはどういうことを言っているかといいますと「非暴力も暴力の一種だ」と言っている。これが第一点。これは私には衝撃的でした。非暴力は暴力の反対概念だとされているが、アーレントはそうじゃない、非暴力も暴力の一種だという。

おそらくその考え方の源流にはロシア革命、その前のフランス革命がある。暴力によって新しい時代を実現した政治革命です。その革命肯定の思想が流れている。古き権力を暴力によって打ち倒すことは正義だという考え方があり、これがアングロサクソンの文明において抜きがたく、今日まで生き残り続けていると私は思いますね。これがやはりガンディーの非暴力がいつも躓きの石になってしまいう根本の原因のような気がいたします。それです、アーレントの議論のなかでもう一つこういうことを言っているのです。ガンディーの非暴力が成功したのは相手がイギリスだからだと。

これ面白いですね、相手がイギリスだから、うまくいった。けれども相手がもしナチスだったら失敗しただろう、ソ連だったらこれも失敗したと。そして、付け加えて日本軍国主義の場合も失敗しただろうという。こういう限定的な評価ですね、アーレントのガンディーの非暴力に対する考え方は。だから私はずっとガンディー、ガンディーと言いつつ、ガンディーの非暴力が浸透していかない。それがこの問題に関わる。

そもそも性の乗り越えなどということが可能かという問題があるでしょう。そして、国家の乗り越えも実現できるのかということも。しかし、国家の乗り越えについてはロマン・ロランはガンディーにまったく賛成していたと思います。これは日記における両者の会話を見ておりますと、常にロマン・ロランが持ち出すのはヨーロッパという言葉でした。今、われわれの世界は、EU、EUといっています。そういう考え方がもうすでに表れている。ガンディーとの対話のなかでロマン・ロランはずっとヨーロッパ、ヨーロッパと言っている。だからドイツとかフランスということは出てこなかった。国を超えろという観点では、だいたい同時代的な考え方が共有されていたような気がいたしますね。フランス人のロマン・ロランがドイツ人を主人公にした『ジャン・クリストフ』を書いている。『ペーターヴェンの生涯』を書いている。みんなその実践ですよ。そして、やがてマハトマ・ガンディーの伝記も書く。そういうところがみられる。だから世界市民、あるいはヨーロッパということを主軸にして世界の将来を考えようとしている。ところがその当時のヨーロッパにあたる現代のEUがイギリスのEU離脱で揺れ始めている。そういう問題を考える上でも両者の関係性というのは面白いと思いますね。

それで、その相手がイギリスだったから成功したというアレントの考え方は、私は間違っていると思うんですよ。ガンディーはたとえ自分が暗殺されようとも、自分の非暴力の運動についてくる若者たちに大量の犠牲の山が築かれようと、それは覚悟の上だったと思いますね。犠牲を覚悟の戦略とみなければいけない。国内でイギリスに抵抗して独立運動を展開するときに、多くの若者たちが志願してくるわけです。そういう若者たちに対してガンディーは誓約書を書かせています。その誓約書の第一条に出ているのが「貴方がこの運動に参加して命を失った場合、貴方の家族のために経済的支援の要求は一切致しません」。そういう条項が入っています。死ぬ覚悟でやりなさいよと言っているわけですね。非暴力というのはその点では暴力的な圧力をかける、その線に限りなく近づく意味での非暴力、命を懸ける。この感覚というのは日本人にはないのですよね。これはやっぱり日本にガンディーの非暴力がなかなか理解

されないもう一つの原因かなと思います。ナチスと戦ってもガンディーは非暴力の戦略を捨てずに、犠牲の山を築いても抵抗したと思います。それをアーレントに言ってやりたい。日本人のアーレント「信仰」をみていて、そう思う。右も左も。これも二、三回書いているのですけれどね。わが国では無反応でした。

それで革命を認めるか認めないか。革命的暴力は正義とされるのですよ、ある意味では。暴力というのは二種類あると。これはヨーロッパの基本的な考え方です。古き体制を倒すためには正義の暴力が必要である。けれども、古き暴力はそのものが悪だから、これは暴力的に倒してもいいと、こういう考え方ですよ。だから原爆の問題一つとりましても、なかなかアメリカなど原爆保有国は否定の方向にいかない、廃棄の方向にいかない。正義のために原爆が必要だという考え方が背後にはある。暴力はやっぱり二種類ある、こういう考え方ですね。暴力性を人間から排除することは困難ではあるにしても、まずそのことから考え始めなければいけないという点は、やっぱりまだ残されていると思いますね。

両性の融合と政治・宗教のバランス

—— マイ・マザー、ガンディーというところから先生の世界、お話が広がっていったのですけれども、マイ・マザー、テツオ・ヤマオリ(笑)。また、母なるロマン・ロラン。ロマン・ロランも『魅せられたる魂』で女性(アンネット)を主人公にして、その主人公の最愛の息子が亡くなりますので、そういう性の乗り越えと世代間をテーマにしたストーリーが描かれています。山折先生のなかのガンディー、ロマン・ロランに重ねてお話を拝聴していて、先生の女性性、性の乗り越えというのは、どういう問題として受け止められているのか。ちょっと話が突飛になりますけれども先生にどんなことを聞いてもいいよと言われていきますので(笑)、ほかの講演会では聞けないようなことを、おたずねしてみたいと思います。もしも、ガンディーのように奥さまを先にお亡くしになられ、一人になって、この子を

頼むと遺言されたら、先生でしたらガンディーと同じように又姪を母として面倒をみるというような、そういう実験に足を踏み入れられますでしょうか。

男性性と女性性の間の非常に複雑な問題、それから暴力と非暴力の間も簡単に分けることのできない、非暴力のなかにも暴力が含まれているという問題。それから国家の乗り越えの問題。そういうものを考えていきますと、容易には解決していかないような境界に橋を架けたり、境界を乗り越えたりという問題がどうしても出てくると思います。

先生はガンディーについていろんなところで講演され、どうすれば日本人、現代人に伝わるだろうかということにずっと何十年をかけていらっしゃるわけですけれども、なかなかそれは難しい、日本人はガンディー嫌いだということもおっしゃられています。今日ではロマン・ロラン嫌いなのか、そういうようなことも考えなければならぬかもしれません。ロマン・ロランやガンディーを継承することの魅力もございますが、難しさもひしひしとお感じになられていると思います。また、現在のインドの、それからフランスの非ガンディー、非ロラン的な状況、両国も核保有国ですし、このような状況のなかで、いかに実験的に考えてゆくのか。

話がちょっと広がってしまいましたが、先生のなかでのそういう解決がつかないような、男性性をどう乗り越えるか、あるいは、日本人は伝統文化のなかにガンディーの母性性と共鳴するような、そういう宗教文化伝統的な知恵をどこに発見したら良いのか。現代の問題だけではなく五百年、千年を超えるような伝統文化との共鳴という観点からも、非暴力の問題を考えなければいけないと常々おっしゃっておられます。そのあたりのことについて先生のお考えをいただきたいと思います。

最近も上野千鶴子さんとご対談なさって、ガンディーの話をそうかなと思いつつも、そういうところまで話がなかなかつかなかったとおっしゃっていますので、ここではガンディー、ロランについて本音はこうなのだけれどという、そういうようなお話をぜひ、うかがいたいと思います。また、どちらかのつれあいを亡くしたり、家族を亡くしたりし

て一人でどう生きてゆけばよいのか、そのようなテーマもロマン・ロラン、ガンディーの存在から浮かび上がって来る気もいたします。いかがでしょうか。

山折 あね、年が解決するということがある。高齢者になれば男性性、女性性を自然に乗り越えてしまう。しかしそう言ってしまうえばつまらないよね、実験台にならない。非暴力そのものの問題を回避してしまうということになるから。

そこで、一つの水路がないわけじゃない。私とその水路について行き当たった人の一人が河合隼雄さんでした。御承知のように河合さんと私は日文研（国際日本文化研究センター）でも一緒にさせていただいたのですが、ユング心理学を日本に導入された方だ。

ユング心理学の一つの特徴、男性性、女性性に関する特徴というものは、年を重ね、成熟すると男性は内面に女性を感じるようになる。女性は成熟して年を重ねるとその身体内部に、人間内部に男性性が浮かび上がる。そこで一種の両性具有的な状況が出て来る。つまりその両性具有的な身体状態というものが暴力への防波堤になる傾向をなすのではないかと、といったあたりの問題で語り合ったことがあるわけです。

ああそうだなと。ユングというのは、これはもちろんヨーロッパ人、フロイトの弟子です。フロイトの心理学では、ご存知のように、男性性と女性性というものは、あるいは男性、女性というものは太い二本の柱です。しかし、それを何とか融合しようとする。人間の本心というのは、そういう二元的なものが最初から最後まで貫かれていますのではないと、そういう認識ですよ、ユングの場合は。これは非常に東洋的な考え方に近いかなということがあって、ユング心理学、とくに河合さんが導入された箱庭療法なども、そういうことを前提にした考え方だと思う。

また、私は、日本の歴史を見ますと、よく言うのですが、千五百年の歴史のなかで長期にわたる平和な時代が二度あるのです。第一回目は平安時代の三百五十年、桓武天皇による平安遷都から源平の戦いが始まる保元平治の乱のあ

たりまで、だいたい三百五十年。貴族の支配体制というのはずっと持続的に続いているのですよ。しかしその後、南北朝から戦国時代にかけての戦乱の時代が始まりますけれど、再び家康によって江戸時代がつくられる。これは二百五十年間ほとんど完璧な平和の状態です。要するに、これほどの長期にわたる平和を二度も実現している歴史を他の地域に求めたらどこにもないんですよ。ヨーロッパは近代以前は千年間戦争ばかりしている。インドも中国もしょっちゅう王朝交替、宗教戦争、血で血を争う戦争ばかりです。

なぜこんなに長期にわたる平和が実現したのかというと、暴力のコントロールに成功したということですよ、それ以外にない。その原因は何か。これはもちろん、政治、経済、外交、軍事様々な面で考えなければなりません。それから周囲を海に囲まれている、そういう地勢学的な環境上の問題も大きいでしょう。だけれど、もっとも根本的な問題は何かと問い詰めていきましたらね、これは私の仮説なのですが、政治的な権力、これは暴力そのものです、それと宗教的な権威、これらが互いに他を侵さないという二元体制がつけられていたとき、長期にわたる平和が実現した。

平安時代は、天皇というのはたんなる象徴的、お飾り、お神輿に乗った神さまですね。実際に権力を握っているのは政治家たちだ。ところが政治家はけっして象徴、宗教的権威の地位を侵さない。これの原則が出来上がったのはだいたい一〇世紀くらい。象徴天皇制というものは平安時代に出来上がっている。これは私は一番の平和を実現する重要な土台だと思っております。その土台をさらに辿ってゆくと、暴力のコントロールが実現できた。暴力を非暴力的な宗教的権威、たとえば、天皇権威によってコントロールした。いかなる武力、軍事力を持っている將軍たちも、征夷大將軍の地位にある連中も、最後のところでは、天皇位を一突きすれば追い払うことができたけれどもそれをしなかった。信長も秀吉も義満も何もしなかった。

つまり、その自生的な非暴力、日本型の非暴力とよく言っています。同じことが江戸時代に行われる。政治的権力

が江戸に移る。天皇さんは京都に残す。江戸の武家軍政権は決して京都の権威を侵さなかった。だから今日の京都が存在するわけです。この平和実現の原理というものを、どうも日本の歴史学とか憲法学はあまり問題にしない。平和研究というものは非常に盛んでありますけれども、それは日本以外の地域における紛争を、どのように日本以外の方々が解決しようとしてきたのか、そればかり研究している。平安時代の三百五十年、江戸時代の二百五十年の平和の時代がなぜ可能だったのか、その時代における暴力のコントロールはどういうものだったのかということにはいかない。

そこで、さきほどのユングの問題が出てくるわけです。これをいち早く日本人が受け入れた。そういう素地があるからだと思います。日本型の非暴力の伝統があつて河合さんのあの心理学が一時日本列島を覆ったわけですよ。河合さんがいなくなつたとあつて、ちよつと衰えが激しいのですけれども、ユング心理学は。

「分割相統」という発想

——先生と一緒に韓国に参りましたときに、やはり朝鮮王朝の五百年ということを向こうでは先生はおっしゃられて、スケールの大きな視点で非暴力と文化の問題について語られたのを思い出しました。

今日は非常に広範なテーマが展開されることが予想されていますけれども、ガンディーやロマン・ロランのような巨大な存在を、あるいは日本の非暴力の文化伝統というのも平安時代、江戸時代のお話を重ねますと、それをどういうふうに引き継いでゆくかという観点からは、巨大なテーマに映るのですけれども、先生はそれをすべて引き受けて継承することが難しいときにも、人によつて個性も違えば特徴も違いますから、すぐれた指導者やその思想を、次の世代の者がどのように受けついでいくか、つまりどのように分担して相統していくか、換言すれば「分割相統」という問題が可能かどうか検討してみなければいけない、とくにガンディー論のなかで、そういう印象的な言葉を使われ

ていらっしやいます。

日本文化の、あるいは伝統文化のこういうところがガンディーやロランに近いということが、すぐには思いつかなかつたとしても、あるいはガンディー、ロマンについての知識がそのままのかたちで思想的に継承されなかつたとしても、お互いに共鳴し合つて響きあつたりすることは可能だと思ひますし、そういう点も先生はいろいろと思案を重ねられてきておられると思ひます。そして、これから私たちはロマン・ロランやガンディーとの対話をしながら、どういう方向に足を踏み出してゆくことになるのか。現在から未来を少し展望するようなお話に移していつてみたいと思ひます。

世のなか、新しい世界を切り開くために革命、暴力的な正義は必要であるという考え方がヨーロッパのもう一つの伝統として抜き差し難くあるということを印象深く拝聴しましたが、これを持ち越えるものとして、ヨーロッパのなかでもアッシジの聖フランシスのような、ロマン・ロランがガンディーをたとえるときにずっと聖フランシスを挙げているわけですけれども、そういう伝統もござひます。それから日本のなかでも、女性性を獲得した観音菩薩のような伝統もあります。そういう側面を重ねながら、先生が今、非暴力的な日本の文化伝統の問題としてロマン・ロランやガンディーと重ねながら、こういうものが大切ではないだろうかとお考えになられているところをうかがいたひと思ひます。

ナチスや日本軍国主義にはガンディーは対抗できなかつたのではないかという、アーレントの批判に対して、私も山折先生がおっしゃつたところに共感します。今後どうなるかという問題もありますが、何といつてもナチスも日本軍国主義も敗北したわけです。とくに敗戦を経験した後の日本に、先生が青春時代を過ごされた戦後日本ですけれども、そのなかで新たに立ち上がつて来た文化の流れのなかで『魅せられたる魂』等、いろんな訳業が世に出たこと、そういうことも連続している面があるかと思ひます。

つまり、戦後の日本で、新たな大切な文化が生まれてきて、そして今日に至っているようにも思われます。それは俗に戦後民主主義とかそういう言葉で、けっこう、議論が縮小再生産されてきてしまったことがあると思うのですけれども、今後の日本の文化、あるいは、世界の情勢を考える上で非常に重要であり、まだ積み残している問題、等閑視され置かれてきている問題があるようにも思われます。いかがでしょうか。

山折 だんだん、だんだん難しくなってきた(笑)。

—— 難しくなってもいいんだということですから。

山折 そうだ。いいよ、いいよ、それは。

よく、友人たちやジャーナリストの方々と話しているときに聞かせることがあるんですよ。それは二〇世紀全体を見渡して世界をリードした、世界を変えた、革新した政治家を五人選ぶとしたら誰だろうということをいうのですよ。二〇世紀という枠内でいえば第二次世界大戦の前後を外すことができませんから、まずルーズベルト、チャーチル、スターリン。中国の毛沢東も欠かせないね。これで四人出てしまいます、政治家が。あと一人。五人目は誰だ。やっぱりガンディーが欠かせません。どうしたって欠かせません、という人多くの人が賛成して下さい。ルーズベルト、チャーチル、スターリン、毛沢東、ガンディー。これはやっぱり二〇世紀を動かしました、政治の世界をね。インドはイギリスを打ち負かしたのですから。

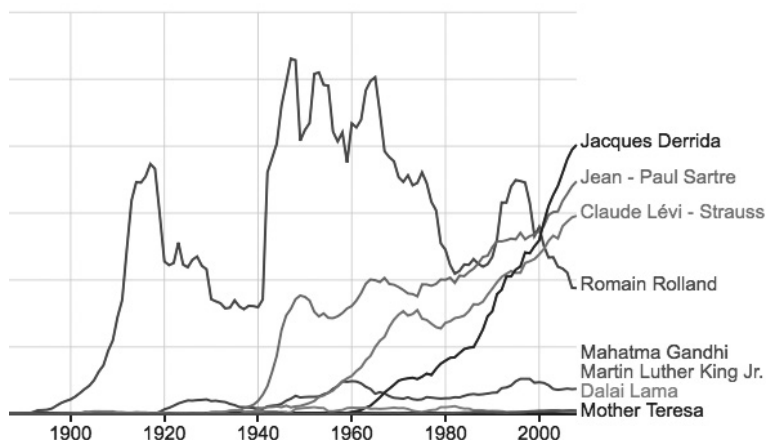
では、次に同じ二〇世紀で非常に大きな仕事をした思想家、知識人を五人挙げたらどうか。アインシュタインがいたい挙がりますね。トルストイがやはり二〇世紀にかかわっている、多少。ハイデッガー。そうしてロマン・ロランも欠かせない。これでもう四人。もう一人どうしてもというとなガンディーが入る。いかがですか。ガンディーが入りませんか、知識人、思想家として。これ、なんとなく安定する。知識人五人と政治家五人。両方に入っているのはガンディーだけなんです。ガンディーのように両方の分野に入る人は、今挙げたなかでおらんでしようと思つて

きました。今日、この会に出てくることになって、もしかするとロマン・ロランが知識人のなかに、政治家のなかにも入るかもしれない、とふと思った。そして毛沢東を外す(笑)。このへんがこれからの問題でないかと思うのです。まあ、スターリンも外してもいいのだけれども(笑)。ロランはじっさいレーニンを評価していたがスターリンは評価していない。毛沢東、スターリンを外してもよい。

もう一人、日本人から入れたい。最終的に出てきた日本人は誰か。二名いる、候補者は。一人は柳田國男、私の好みです。もう一人が昭和天皇。もしかすると昭和天皇というのは、戦前の軍国主義の象徴、それから戦後の民主主義、非暴力、平和の象徴。二つの側面を持っているわけですね。世界で一番名前が知られている日本人はやっぱり昭和天皇。ととても柳田國男の名前を知っている人はそんなにいない。だけれどその存在感というものは、柳田さんは世界性をもっているとは私は思っているのですけれど、そういう問題があります。そうすると、なぜ昭和天皇がここで政治の舞台に登場するかというと、あるいは毛沢東とスターリンを蹴散らして昭和天皇を五人のなかに入れるとすると、議論は戦後の日本の平和の時代になるのですよ。憲法第九条。今回の天皇さんの生前退位の問題を絡めると第一条と第九条の相関関係が国家と平和という問題を考える場合、どうしても前面に出てくる。そのメリット、デメリット、プラス、マイナス両面があると思います。

こういうふうを考えていきますと、やっぱり時代は動いている。これから誰の、どこを継承するかという問題は、どういう人物を評価していくか、そういうときに世界の五人というのは歴史の動きをダイナミックに相対的にとらえていくうえで面白い方法ではないかと思うのですね。

それで、知識人の代表、政治に向けて発信力をもつ人物としてガンディーはこれはいまでもない大きな存在であったわけです。今日はロマン・ロランを加えてもいいのではないのかとふと思いました。ただ、そのことを今日の日本人があまり自覚していない。ロマン・ロランがほとんど読まれなくなっている。それはなぜか。それは、われわ



(Google Books Ngram Viewer のフランス語文献データベースによる出現頻度 2016年10月時点)

れそれぞれの責任なのか。

そういう点で思想というのは、やっぱり誰かが誰かの思想の根源みたいなものを分割して、ある部分を最高度に評価して受けついでいくので、それを一徹に全面継承というのはいくつかできないのですよ。ガンディー的な生き方をしろといわれたって、それをできる人間は他に一人もないわけですよ。同じようにロマン・ロランの場合だってそうではないでしょうか。それは時代が違いますが。当然どこかの部分を拡大し継承し、それを広げていく。この方法が、そもそも研究会というものの存在の根源に据えられていけば、その研究会は発展していく。

—— 今、ちょうどグーグルがビッグデータをつくっています。フランス語で書かれた何十万件のデータベースのなかで全文検索をしてロマン・ロランやサルトル、デリダ、レヴィ・ストロース、ガンディー、マザー・テレサ、ダライ・ラマ、そういう方々の出現頻度を見れば、現代のフランスでもロマン・ロランはまだまだ高い関心をもたれ、そして関心が呼び覚まされることがあるということを感じます。

ロマン・ロランを毛沢東からかえて、あるいはスターリンからかえてというのが非常に印象的だったので、ご紹介させていただきました。

ひとりの哲学と一日のリズム

—— ロマン・ロランは、彼自身は非常に深い宗教性を湛えていながらも、当時のヨーロッパでは青年も含めて三分の二ぐらいが、ロランの見立てですと、いわば伝統的なキリストの信仰を失ってしまっていて、そのなかで激動の時代にファシズムや資本主義のいろんな格差状態や社会矛盾をどう乗り越えていくのか、それを考えたときに自分は信仰を持たない人の側にも立たなければいけない、立ちたいということを印象深く語っています。いわばガンディーのように信念を持って生きる立場と信仰を持たない現代ヨーロッパの新たな思想潮流の間に橋を架けようとしたわけです。

山折先生は日本の伝統文化をただ研究するというだけではなく、いかに、それによって現在、未来を生きるかというテーマにもチャレンジされ、いろんな新たな視点を私たちに投げかけてくださっています。しかし、現代、そういう深い文化伝統に基づいた信念、そういうものを持たない人に対して、どういうふうに訴えかければいいのか。ひとりの哲学、悪の問題ですとか、さまざまヒントが日本の文化伝統のなかにもあって、先生はそれを発見なさってこられたわけですが、また、それを伝える難しさも感じていらつしゃると思います。

そういう、伝えるにくいものを伝える難しさというものはロマン・ロラン自身が同時代で考え、感じていたことで、しかし、いち早くヨーロッパの知識人としてガンディーの本を書いたのはロマン・ロランであり、日本でガンディーを何とか伝えようとしてずっと挑戦を続けていらつしゃるのが山折先生ですので、信念や信仰、文化伝統を失っている現代人や若い人たち、あるいは年齢層に限らずどの世代でも、そういう困難な状況のなかで私たちは何を見つけていけばいいのか。文化に新たな息吹を吹き込むためにどうすればいいのか。そういうことについて先生が最近お考えになられていることをうかがいたいと思います。

世界はGゼロ（イアン・ブレマー）といわれるような状況でどのように進んでいくのか。これは政治だけでなく学問

の自由というものも失われてゆきつつあるような、今日に限ったことではないわけですが、こういう状況もござい
ます。宗教と非宗教、それから政治と宗教、谷垣（禎二）さんとご対談もなさっていらつしやいましたし、そういう困
難のなかで橋を架ける難しさ、しかしそこに見出す喜びと申しますか、なぜチャレンジを続けていくのかということ
について先生が日ごろお感じになられているところをおうかがいしたいと思いますが、いかがでしょうか。

山折 誇大宣伝をされると何もしゃべれない（笑）。ほめ殺しだよ。ひかえてくれと言ったのだけど。

——（先生は常日頃、批評の重要な方法には二つある。一つは小林秀雄の方法。真に批評すべき相手の核心部分、その優れたた
ころをほめて、ほめて、ほめ抜く。そのことではじめてひらかれてくる世界がある。もう一つは鶴見俊輔の方法。大刀を自分の背
中に突き刺し、腹から出た切っ先で相手を刺す。そうおっしゃっておられますが）今日は鶴見俊輔ではなく小林秀雄にあや
かるかたちで、ぜひおうかがいしたいと思えます。私は、自分は性の乗り越えということは全然できていないと感じ
ています。先生がもしそれができているのだつたら羨ましいなというふうに思いながら。

山折 それは歳のせい（笑）。

—— でも、講演会などでは、なぜかいろんな世代の女性にもてている先生をお見受けしたりして。

山折 誇大宣伝だね（笑）。

—— なかなか、ひとりで孤独を感じる方が多いといわれるこのところの世相のなかで、先生は『ひとりの哲学』（新
潮社、二〇一六年）ということを最近お考えになられていらつしやることでもありますし、その話をぜひお聞きしたい
と思えます。

山折 私は、今は比較的健康なのですけれどね。しかし、八五歳です。だから、だんだん気力、体力も衰えてきてい
る。若いころはほんとうに病氣ばかりしておりました。消化器系はほとんど病んでますね。胃袋半分切っています。
それから晩年になって胆のうを全摘しておりますから二本メスの線が入っている。生涯、下痢との二人三脚で、肝炎、

膝炎。膝炎の激症には苦しめられて死ぬかと思う経験をしました。

ところがですね、宮仕えを辞めてからとたんに健康になりました(笑)。宮仕え、給料取りの生活がいかにストレスか。これがもうやっぱり病気の万病のもとということを実感いたしました。以来、最後の宮仕えを辞めてから、どこにも勤めないと決意いたしました。以来、老人フリーターと称しております。ただ、フリーターは大好きです。これがほんとうに自由でよろしいですな。私には健康の素。

それで老人性早起症で朝三時ぐらいに目が覚めてしまいますね。前の晩はだいたい九時になると眠たくなってきます。朝三時に起きまして、ひとりで台所へ行ってお茶を入れ、一杯ぐつと飲む、これが甘露ですね、早朝起き掛けのお茶、煎茶です。それから、自分流、山折流体操をちよつといたします。二〇分くらい立ったまま、それからまたお茶を一杯して仕事部屋へ行きます。

仕事部屋は乱雑になっているのだけれど、自分の机らしきもの前に小一時間座ります。私は、永平寺でならった座禅を勝手な方式で一時間ほど座ることにしています。今は足腰が弱って、緩やかなあぐらをかいて座布団を四つ折りにして尻に当てて安定をさせて、それで香炉に線香を一本立てまして、燃え尽きる間にだいたい五〇分くらい、真つ暗闇のなかで線香のあかりを見ながら座っています。これを四〇年くらいずっと続けている。雑念妄想ばっかりです、毎回。無の境地になったことは一度もございません(笑)。あるとき思ったのですが、ああ、雑念妄想でいい。これ出し切ると気分がいいんですね。それから私なりの仕事、といっても原稿用紙に文字を書いていくだけの仕事なのですが、それを二時間から三時間やります。

だいたい朝六時ぐらいか七時ぐらいになって夜が白々と明けてくる、すると外に出て散歩いたします。私は下京区に住んでおりますので、路地小路をぬって歩いてみると六時にはきれいに掃き清められているのですね、京都というところは。これはほんとうに奇跡的な光景ですね。やっぱりお家の方が外に出てこられて丹念に掃除をされる。掃除

をされた後はこんな気持ちいいことはない。世界で京都だけじゃないでしょうか、早朝あんなにきれいな街は。これは日本の一番自慢できる場所ではないかと思いましたがね。

そうして五分くらい歩くと、ここが親鸞聖人がお亡くなりになったところだという石碑がある。さらに五分くらい歩いていきますと、ここは道元禪師がお亡くなりになったところだと。反対方向に五分くらいで本能寺跡、信長の殺されたところだ。東の方に歩いて行くと蕪村終焉の地、これも五分です。その隣の通りに本居宣長ご修学の地。京都はすごいな、三、四〇分歩くだけで五百年の歴史を散歩している。

これを楽しんで帰ってくる。それから朝食が始まる。歯がぼろぼろ、差し歯、入れ歯、ご飯を食べるのはゆっくり食べる。噛んで、噛んで、噛んで、食べる癖がついてしまった。七〇歳ぐらいから三〇回噛めというんですが、私は五〇回から六〇回噛む。時間がかかるのですよ。朝、朝食に一時半ぐらいかかりました。

同じように夕食は、私はアルコール中毒症ですから毎晩晩酌をします。大体一合から一合五勺ぐらい。ゆっくり噛んで、噛んで、ちびりちびり飲んで、だいたい六時半ぐらいから始まって九時近くになる。飲み終わる、食べ終わるまで。テレビでも見えますから、野球なんて今晩も楽しみですけれど。いつの間にか連れ合いがいなくなっていますよ。連れ合いは二、三〇分でないなくなって、勝手に自分の食器を洗い場に持って行って、それで好きな仕事をしています。これがいい感じの時間なのです。ひとり酒。九時ぐらいになると半分眠っています。飲みながら、それで、もう限界というところで切り上げて、さあ、死ぬか！ とかけ声をかけて寝床に転がり込む。

私の一日のリズムです。

熟睡している人間の顔というのは死者の顔とそっくりですよ、デスマスクです。生気を完全に失っている。夢を見て歯ぎしりをしているときの顔は可愛らしい顔をしている。だんだん眠りが深くなって死に近づいていく。明け方になってまた夢を見たり寝言を言ったりして覚めていきます。ああ、人間の一日というのは生と死を繰り返しているな

と。で、朝、目がパツと覚めると、ああまだ生きています、そういう生活をしています。

そういうことがあって、しばらく我が人生の三原則といったようなことを考えるようになりまして、それは単純です。食べ過ぎない、飲み過ぎない、人に会い過ぎない。

会い過ぎると一杯やろうかということになる。今日も危ないですよ、今日は会い過ぎています。後で一杯やることになりそうなのです。それでつい飲みすぎる。だけど人に会うのはこの歳になると一番楽しみなのです。会い過ぎてはいけなけれども、人に会うのは最高の楽しみ。これ以上の楽しみはありません。午前中はだいたい新聞を読んでいる。半分眠りながら。午後になるといそいそと出て行って、ひとさまにお会いする。

こういうリズムを繰り返しておりますと、ああ、やっぱり食事のコントロールは、どこかで暴力のコントロールにつながっているなと感じるようになりました。それは前からなんとなくそうは思っていた。日本のお坊さんが古代中世、修行のなかで断食ということを非常に大事にしている、一週間断食をする、一月、宗教的行と合わせて断食をする。比叡山で行われている千日回峰行がそうですね。一日四〇キロメートル歩くんですよ。それから七百日が終わったときに堂入りということをやって一週間完全断食に入る。水も飲まない、眠りもしない。断食、断水、断眠ですよ。その限界がだいたい一週間。この宗教的行をなぜやるのか、やっぱり暴力のコントロールです。それは、中国以来の伝統であり、また、お釈迦さんも断食した。キリスト教においても齋戒という食事のコントロールはアジアほど厳しくはありませんけれども、イエス・キリスト自身が聖書によると四〇日間飲まず食わずで砂漠をさまよい歩いている。食のコントロール、これを抜きにしてキリスト教、仏教の成立はない。ガンディーの非暴力というのは究極的には、そこにいく以外にない。

そこで今度、日本の科学者がノーベル賞を、大隅先生がとられた。オートファジーという原理は細胞の自食作用だと。私は膝を打ちましたね。人間の生命体のもっとも根元を成している細胞というのは、自分で自分の栄養を食べて

いる、自食というのとは自分で自分を食するということ。一種の人間の断食の作用に対応する細胞のコントロール。これにはプラスの効果とマイナスの効果があると両方ちゃんと言っている。人間の場合と同じですよ。断食のやりすぎ、間違えをやりますととんでもない、命を失うことになる、危険なことなんです。

でも私は、最後は、許されるならば断食往生をしたいと思いますと思っている。今、お医者さんに延命治療をやらなくてくださいといくら言ってもきかないですよ。それは法律的にできない状況になっていることもありますし、それからやっぱり日本の経済成長と薬学、医学の進歩とは密接に結びついていますからね。高齢者を簡単に死なせない医学の要請でもあるわけです。日本経済成長の政策の要請でもあるわけです。そして、それを家族が要求している。生き延びていればそれだけ年金が入るわけです(笑)。だから、医学の側からいつて絶対に尊厳死とか延命治療の問題に積極的にかかわる人はいない。そこで、自分で自分に延命治療をさせないようにする以外にない。その根本は何かという断食に行くんですよ。そのことを直感的に把握し経験的に知りつくしていたのはガンディー。だから彼が政治折衝をする、非暴力の行動に出るときには必ず断食という前哨戦に打って出るのですよね。これでやっぱりイギリス人はおたおたあわてふためいたわけです。

さあ、ハンナ・アーレントさんはそこまで気づいていない。非暴力の暴力性ということは指摘したが非暴力を内面的に支えている食じきのコントロール、食じきのコントロール、キリスト教でも仏教でも先人たちがやってきたその伝統の意味にはまったく気がついていない。そういう観点からの批判が必要なのですよ、今は、と思います。

それを今度のノーベル医学生理学賞が証明してくださったかのごとき状況であります。メディアからはまだそういう観点は出ていませんよ。あの細胞の自食作用は人間の断食と連関するよと誰かが言わないと、というか、自分が言わなきゃならない。

—— 今、言ってくださった(笑)。

ガンディーの断食の重要性についてはロマン・ロランも注目して、日記にガンディーが何を食べたかを記録し、インドに戻ったガンディーがイギリスとの非暴力闘争の渦中に断食を続けているときにも手紙を書いて二人のこのころの交流がございいます。

ロラン、ガンディーに伝えたいこと

——最後に先生におうかがいしたいのですが、以前、先生は亡くなられた後、何かまたその後の世界があるとお考えになりますか、それとも何もないというふうにお考えになられていらつしやるのですかと、そういうことをおたずねしたときに、何かあるのかもしれないというふうにおっしゃられていました。

親鸞と道元の話から始まって、さきほどは文化の時空を旅するようなお話になっていましたが、もし、あの世に旅をして、親鸞、道元、日蓮、良寛さんだけではなくロマン・ロランやガンディーにそこで会ったとしましたら、どのようなことを聞いてみたいか、あるいはどういうことを言ってみたいか、京都の路地はガンディーさんが歩かれても心躍るようなすばらしい清潔さですよ、など、いろいろなことが思い浮かぶのですが、ロマン・ロランやガンディーにまた別の世界で先生がお目にかかったとしたら、どういうことを投げかけてみたいか、あるいは何かおっしゃりたいことがあるか、突拍子もない質問をしてもよいというお許しをすでに得ていますので(笑)、最後にぜひ、先生のお考えをいただきたいと思います。

河合隼雄先生がお亡くなりになられた直後に先生にお目にかかることがあつて、寂しくなった、ずっと精神治療家・心理学者と宗教学者で対話を続けてきた、この対話は終わっていない、これからもずっと続くのだとおっしゃられていたのが印象に残っています。今日のロマン・ロランとガンディーの対話も終わっていない、ずっと続いていくものだと思うのですけれども、また別の世界に旅立たれたとして、ロマン・ロラン、ガンディーに先生が何かおっしゃら

りたいこと、おたずねになられたいこと、いかがでしょうか。

山折 一番最後に意地の悪い質問が来た(笑)。

私はね、最近とくにそう思うようになったのだけれど、あの世の問題に關していえば、自分が死んだとき自分の死体は生ごみになると思っています。だから、生活の暮らしのなかで出た生ごみを捨てるように捨てる以外にない、そういう物質になると思っています。その点では、べつに無神論者を気取るわけじゃないのですけれども、靈魂の實在を信ずることができない。天国、地獄、極楽、いっさいその實在も信ずることができない。それから生理現象からみても、身体が崩壊し白骨化していく過程を見ても、生ごみ以外の何ものでもない。

ただ、ただですよ、生ごみはやがて土に還る。土のなかで無数の有機物、微生物によつて分解されて新しい生命の栄養素になる、肥やしになる。そこでもう一つの別の生命に転じていく。そういうように考えるようになりました。

じつは、よくお坊さんに会うと、引導を渡してくださいよと言うように今までしてきました。高齢社会をむかえて植物人間になる人間がどんどん、どんどん増大していく。死をむかえるときの、その、どういうふうにしてむかえたらいいかについて、宗教者こそ教えなければいけないのだと思うから。

これが引導を渡すことをほとんどやっておりません、今のお坊さんは。私も坊主の一人ですが、やれないのですね。あの世、別の世界を信じていることができないから、ここにゆきますよといえない。ゆくのは何ですかと問われると、魂の實在を、靈魂の實在を信じていないとこれもいえない。だから結局、お医者さんが尊厳死、安楽死に積極的にかわるることができないように宗教者は引導を渡すことができない状況にある。死をどう迎えたらよいかかわらない。これは二つの悲劇ですよ、この高齢社会において。

とすれば自分で自分に引導を渡す以外にない。自分で自分に延命治療を拒否する以外にない。それで先ほどの断食という問題がでてくるのですけれども、では引導を渡すことは自分にいうときにどう言うか、ということを考えるに

至って今いったようなことになる。

遺体は生ごみだ、土に還る。還って分解されて新しい生命の栄養素になる、その循環を信じる。それは今、何も私
が初めて言ったことではない。昔からこの日本列島にすむ人々、先人たちが言い続けてきたことです。死後どこへゆ
くか。土に還る、自然に帰ると言い続けてきたではありませんか。

国破れて山河在り。身なんてなくなっても自然は残っている。帰りなんいざ、田園將に蕪れなんとす。自然への回
帰願望ですよ。この感情は千年の間に日本人のころをずっと流れ続けていたことに私は気がついた。それは『万葉
集』『源氏物語』『平家物語』、能、狂言、義太夫、歌舞伎の世界をたどっていったら、みんなここですよ、最後のと
ころは。そうやって引導を渡してきたんだ、先人たちは。

そこに極楽だ、地獄だ、天国だというような観念が入ってくるからややこしいことになる。だまって自然に帰ろう
よ。土に還ろうよ。これね、楽なんです。自分自身に言い聞かせるとき。

ということ、いかにも矛盾するようだけれど、あえていえばガンディーさんにもロマン・ロランさんにも言っ
てみたいと思う(笑)。これは納得してくださいと思うな。そりゃ、仏教の原理とかキリスト教の教義を持ち出しても
あのお二人は納得されない。と思いますが、みなさんいかがでしょうか(拍手)。

文 献

山折哲雄『母なるガンディー』潮出版社、二〇一三年

ロマン・ロラン『インド日記一九一五—一九四三』『ロマン・ロラン全集三』宮本正清訳、みすず書房、一九五八年(一九五二)

ロマン・ロラン『マハトマ・ガンジー』『ロマン・ロラン全集一四』宮本正清訳、みすず書房、一九八一年(一九三三)

ロマン・ロラン生誕一五〇年 財団法人設立四五年記念コンサート

箏とギター、ヴァイオリンとチェンバロで聴くベートーヴェン

記念コンサートに寄せて

ロマン・ロラン生誕一五〇年、財団設立四五年を記念し、会員によるロラン作品朗読の会、宗教学者・山折哲雄氏によるガンディーに関する講演が多数の参加者により盛会に開催されました。ご参加いただいた皆様に御礼申し上げます。

ロランは第一次世界大戦の時に多くの人たちが戦争に賛成し、狂気が支配した時に、母国フランスでは売国奴などという謂れのない中傷を受けながらも、スイスに滞在して、戦争で苦しんでいる人たちを助けるためにノーベル賞の賞金を使いました。『ジャン・クリストフ』や『魅せられたる魂』、フランス革命連作劇、ベートーヴェンに関する伝記や膨大な研究書などの珠玉の作品群と並んで読み継がれてきた第一次世界大戦の時の日記で、戦

争を防ぐために尽力したことが窺えます。

最近の研究や没後封印されていた日記が公開されたことにより、ロランの全貌が明らかになりつつあります。ある一面だけを取り出して、神格化されたり聖人扱いされては困ることでしょうが、人間的な弱みも含めてロランがより身近に感じられるようになってきたかと思えます。

昨年は英国のEU離脱、米国での排外主義者の大統領当選など、世界的に排外主義的な動きが強まり、各地でのテロ襲撃などと相まって、不安な空気が充満した年でした。現代世界は好むと好まざるとにかかわらず、相互に影響し合っており、一国の内部だけで平和に過ごすことができない状況にあります。このような時代にロランの作品は読まれるべきかと思えます。

記念催しの最後として、和楽器と洋楽器の協奏によるベートーヴェン作品の新企画コンサートを開催します。和洋に橋を架ける演奏会で、苦悩を貫いて歓喜へ至るべく格闘したベートーヴェンの青年期の作品鑑賞を通じて、記念すべき年が良い年になりますことをご参加の皆様とともに祈りたいと思います。

(理事長 西成勝好)

ベートーヴェンの曲に合わせて東洋の楽器と西洋の楽器が奏でるハーモニーを想像する—ロマン・ロラン生誕150周年の祝いに、これ以上のオマージュはないでしょう。

「私たちは彼の中で一体となるのです。私たち、地上の全ての民族が。彼は人類友愛の輝く象徴です。」

(1927年、ベートーヴェン没後100年記念の会(ウィーン)でロマン・ロランが述べた追悼の辞「ベートーヴェンへの感謝」から)

フランスロマン・ロラン協会会長
マルティヌス・リエジョワ

記念コンサート

— 箏とギター、ヴァイオリンとチェンバロで聴く

ベートーヴェン—二〇一七年一月二十八日、金剛能楽堂にて

協賛 稲畑産業株式会社

ロマン・ロランとベートーヴェン

ロマン・ロラン（一八六六年一月二十九日—一九四四年一月三〇日）にとって音楽は生涯を照らす光明であった。そのことはロランが『回想記』で次のように述べていることからもうかがえる。「人生の初一步から、音楽はわたしの手をひいてくれた。それは私の初めての愛であり、また、たぶん、最後のそれとなるであろう。女性への愛がどんなものかよく知らないうちに、私はそれを女性のように愛した。」

幼い日に母の手ほどきで始めたピアノで才能を示し、一時期は音楽家になるように生まれついたらと自覚してピアニストになることも考えたが、「両親の期待どおりエコール・ノルマル（フランス国立高等師範学校）を卒業し

た後は母校の美術史の教授になった。

ロランが好んだ作曲家は、バッハ、ヘンデル、モーツァルト、ベルリオーズ、ワグナーらだが、ベートーヴェンこそが生涯にわたってロランの魂の師となった作曲家であった。「生の虚無感を通過した危機に、私の内部に無限の生の火を点してくれたのはベートーヴェンの音楽であった」とロランは『幼き日の思い出』の中に書いている。

ロランは教師を続けながら一九〇三年に、ベートーヴェンへの感謝の歌として刊行した『ベートーヴェンの生涯』で作家として読者の心をつかんだ。その序文で「思想もしくは力によって勝った人々を私は英雄とは呼ばない。私が英雄と呼ぶのは心に拠つて偉大であった人々だけである」とベートーヴェンを敬愛する理由が掲げられている。

ベートーヴェンの作品の中でもロランが特に好んだのは「英雄」や「運命」などの中期の作品ではなく後期のピアノソナタや弦楽四重奏であった。ロランが、今回の演奏会で取り上げる初期の作品を評価していなかったか

という決してそういうことはなく、例えば、ベートーヴェンの生涯には三〇歳頃のベートーヴェンの作品について次のような記述がある。「しかしある楽節、たとえば導入節アインライツングや幽暗な或る低音バスの明暗や幻想的なスケルツォーにおいて、われわれはまことに大きな感動をもつて、やがてきたるべき天才的精神のひらめきを、この若い姿の中に感取する！」

その後一九〇四年からパリ大学で自らピアノを弾きながら音楽史を講義した。同じ年から発表を始めた「音楽小説」といわれている『ジャン・クリストフ』では音楽学者としての経験が遺憾なく発揮されている。

また、一九二一年から刊行が開始された『魅せられた魂』は音楽とは関係のない作品であるが、いろいろな場面で音楽が効果的に使われている。作曲家が主人公である『ジャン・クリストフ』に比べると、その量においてはるかに少ないが、その場面で使われている曲が担っているものは同じだと思う。単にその場面の背景音楽ではなく、登場人物の内面を表現したり、これからの運命を暗示する役割が与えられている。他の作家ならもう

一行か二行加えて説明するところをロランは音楽に語り
せている。

また、使われている作品は、ヘンデルから無調音楽ま
で、作曲された時間や空間を超え多岐にわたっている。
物語の中で音楽が流れ出すと、パリ大学で自らピアノを
弾きながら音楽史を講義していたロランの顔が見える。

ベートーヴェンに話を戻すと、ロランが晩年に執筆し
たのがベートーヴェン研究書『ベートーヴェン偉大な創
造の時期』である。これは亡くなる前年の一九四三年ま
で続けられ、ベートーヴェン研究の偉大な遺産となった。

一九四四年一月二四日のクリスマススイヴにロランは、
ヴェズレーの自宅を訪ねてきた友人ブイエ夫妻の前で
ベートーヴェンの最後のピアノソナタ第三二番作品
一一一を弾いた。そして、六日後の一月三〇日にベー
トーヴェンの使徒としての七八年の生涯を全うした。

(清原章夫 記)

演奏曲目

一 チェンバロのためのドレスラーの行進曲による変奏

Variations pour le clavecin sur une marche de M.
Dresler

二 ヴァイオリン・ソナタ「春」(原題は鍵盤楽器のため
のソナタ、一つのヴァイオリン付き) Op. 24

I. Allegro II. Adagio molto espressiv III. Scherzo.
Allegro molto - Trio IV. Rondo. Allegro ma non
troppo

三 『大ソナタ悲愴』から第二楽章 Op. 13

ヴァイオリン 箏 チェンバロ
Grand sonate Pathétique pour le clavecin ou pianoforte
2 mov.

四 エリーゼのために(バガテル「エリーゼへの手紙」)

WoO. 59

La Bagatelle en la mineur. WoO. 59. 《La Lettre à
Élise》

Guitare solo arr. Masanobu Nisigaki

演奏はギター独奏 編曲：西垣正信

五 マンドリンとチェンバロのための四つの作品

I 最愛の麗しい「J」のためのアダージョ 変ホ

長調 WoO. 43b

Adagio pour Mandoline et clavecin

Guitare solo arr. Masanobu Nisigaki

演奏はギター独奏 編曲：西垣正信

II ソナチネ ハ長調 WoO. 44a

Sonatine pour Mandoline et clavecin

Guitare solo arr. Masanobu Nisigaki

演奏はギター独奏 編曲：西垣正信

III 主題と五つの変奏 ニ長調 WoO. 44b

Variations pour Mandoline et clavecin

Guitare et clavecin arr. Masanobu Nisigaki

演奏はギターとチェンバロ 編曲：西垣正信

IV ソナチネ ハ短調 WoO. 43a

Sonatine pour Mandoline et clavecin

Koto et guitare arr. Masanobu Nisigaki

演奏は箏とギター 編曲：西垣正信

六 機械オルガンのための二つの作品 WoO. 33

Adagio and scherzo for Mechanical Organ, WoO. 33

I アダージョ II スケルツォ (西垣正信 記)

曲目ごとの

ヴァイオリン・ソナタ第五番 へ長調 Op. 24 「春」

交響曲第六番「田園」や交響曲第八番、ヴァイオリンと管弦楽のためのロマンス第二番と同じく、へ長調という幸福感や牧歌的な雰囲気表現する調性で一八〇一年に書かれました。表題はベートーヴェン自身がつけたものではないが、明るく幸福感あふれる曲想から「春」と呼ばれるようになりました。

ベートーヴェンのヴァイオリンソナタでは初めて楽章が三楽章から四楽章に拡大され、第一楽章のエピソードを後に続く三つの楽章に用いるなど作曲技法上もベートーヴェンの個性が際立っています。二年後の一八〇三年から始まるロマン・ロランが傑作の森と名付けたベートーヴェン中期を予感させる傑作です。

第一楽章(アレグロ)簡潔ですが、まさに春を感じる明るく幸福な第一主題で始まります。

第二楽章(アダージョ・モルト・エスプレッシボ)ベートーヴェンが得意とした変奏形式のきわめて抒情的な楽章です。

第三楽章（スケルツォ、アレグロ・モルト）きわめて短い楽章ですが、スケルツォとトリオの対象が印象に残ります。

第四楽章（ロンド、アレグロ・マ・ノン・トロッポ）優美で喜びの感情があふれ、崇高さを感じるロンドです。

「エリーゼのために」イ短調 WoO.59

一八一〇年にウィーンで作曲され、一八六七年に音楽学者L・ノールが『ベートーヴェン新書簡集』として出版しました。ピアノの初心者が多くが、まず弾けるようになりたい曲として目標にするため特に人気の高い曲です。

「エリーゼのために」という表題はベートーヴェン自身がつけたものです。エリーゼが誰だったのか諸説ありますが、ベートーヴェンが一八一〇年に結婚しようとしたテレゼ・マルファッティの書類から楽譜を発見したノールが「テレゼ (Therese)」を「エリーゼ (Elise)」と読み間違えて出版したのではないかという説が有力です。

また、彼女は一八一〇年にベートーヴェンが、ピアノ

ソナタ第二四番をささげた伯爵令嬢テレゼ・フォン・ブルンスヴィックとは別人です。

ところで、ベートーヴェンが作曲に使用したピアノは現代のピアノに比べると、音量は小さく響きもまったく違っていました。そこで本日は、現代のピアノによる演奏では再現しきれない、ベートーヴェンがこの曲に込めた精神を、西垣正信氏の編曲とギター演奏によってお届けします。
(清原章夫 記)

チエンバロのためのドレスラーの行進曲による変奏

「…クリストフは一歳になりかけている。彼はなおつづけて音楽の教育を受けている。フロリアン・ホルツェルについて和声を学んでいる。これはサン・マルタンのオルガニストで、祖父の友人であったが、いたって学者で、クリストフが最も好んでいる和音、やさしく耳と心とをなでてくれて、それを聞けばかすかな戦慄が背筋に走るのを禁じえない種々の和声は、いけないもので禁じられてるものだと教えてくれる。…」ロマン・ローラン『ジャン・クリストフ』第二卷「朝」冒頭 Jean-

この変奏曲はベートーヴェンが一二歳の折にマンハイムから出版されました。大人たちがベートーヴェンを神童として売り出すための布石でした。後の多くの作品と同様、ドイツ語より上品と思われるいたフランス語で楽譜のタイトルなどは書かれています。本人の名前も「ルードヴィッヒ」ではなくフランス風に「ルイ」とされています。そのような「大人たちの迷惑」とは無関係に、この作品は晩年の名作「ディアベリの主題による変奏曲」にいたる人生の変奏の長い旅路を予感させます。

『大ソナタ悲愴』から第二楽章 ヴァイオリン 箏
チェンバロ

この初期の有名な作品は一七九九年に出版されました。とりわけ緩徐二楽章は一九世紀から愛好され多くの楽器のために編曲されました。初版の際の表紙にはそれまでと同様にベートーヴェンはフランス風に「ルイ・ベートーヴェン」と記され、楽器の指定としては、まず「クラブサン・チェンバロ」のために、と記されています。

しかし、この有名な序奏からは数年後に作曲家にパリから届けられるピアノという新楽器の登場を予言しています。今日演奏される二楽章だけは変イ長調という当時稀な調性であることを除いては、穏やかな古いスタイルで、ヴァイオリン伴奏付き鍵盤ソナタ「春」のようにボヘミア・ソナタの様式で書かれています。もっとも愛されたベートーヴェンの歌です。

マンドリンとチェンバロのための四つの作品

これらの四曲は当時のマンドリンとチェンバロのために作曲家二〇代なかばころにボヘミアで作曲したものです。これから、すこし学術的な話をしますことをお許しただきたいのです。これらのあまり陽の目を見なかった作品を今日ご披露できることの足跡を資料としても残したいと思います。演奏家、編曲家として、またラランの一尊敬者としての視点です。私は時々思うことがあります。「ベートーヴェンがもしも少し後輩のシューベルトのように夭折していたならば、後世偉大な作曲家だったろうか」と。私の思いから言ってしまうと、この

四曲があるだけでもその回答です。まず、この四曲が創造された拠り所の二つの楽器についてお話ししなければなりません。鍵盤楽器としては、ベートーヴェンはこの作品の十年後まで現代の人たちが思うようなピアノは所持していなかったし、実在もしていなかったのです。現代の軽い自動車と同じ重さのある大ピアノで弾かれるベートーヴェンの作品は仮想の姿で、ベートーヴェンにさえ思いもしなかったに違いありません。当時、この大家が愛用していた鍵盤楽器は、パリの博物館に現存するクラピコード（ギターのような音色でその十分の一の音量にも満たない）かダルシマやときには東洋の琴のような民族楽器の音がする楽器でした。いわゆるヴァイオリンソナタ「春」にあつても今の標記とは大きく異なります（「春」では「鍵盤楽器のためのソナタ、一つのヴァイオリン付き」とされています）。もちろんヴァイオリンという楽器もその弓も現代とは大きく異なります。後に書かれた名作「月光」や「悲愴」もまずはチェンバロのため、として出版されました。もちろんモーツァルトの多くの、所謂「ピアノソナタ」もチェンバロのためのソナタとして出

版されました。もう一つの楽器「マンドリン」は今日日本でみるマンドリンとは程遠い楽器でした。弦は金属の弦ではなくて羊の腸を振ったものです。しかも多くは四または六コースで小型のリユートといえるものです。なぜ大家がマンドリンのためにこれらの名作を書いたか？二人の人物が関わっています。ひとりには、大家がこの作品を捧げた「美しいJ」、このジョゼフィーヌは有名な貴婦人でボヘミアのマンドリン愛好家でした。もう一人はベートーヴェンのヴァイオリンの先生で親友でもあったボヘミアのクルムホルツです。クルムホルツはマンドリンの名手でした。私は彼の兄の作曲家のほうをより多くの作品と手紙を通じて知っています。クルムホルツの兄はこの作品の直前にパリでボン・ヌフからフランス革命の動乱のなかセーヌに身を投げました。彼はマリー・アントワネットとその侍従長だったランバル夫人（革命で最初に惨殺された女性サポイ・サルディニアの後妃）の音楽教師でした。彼の作品のヴァイオリン伴奏付きのソナタの様式がベートーヴェンのひな形にもなっています。

一 最愛の麗しい「J」のためのアダージョ 変ホ長調

W.O. 43b ギター独奏

私は今日、ベートーヴェンの膨大な作品のなかでもひととき異なる光を放つ美しい作品を紹介できることを幸いに感じます。私はこのマンドリンとチェンバロの作品をギター独奏に書き直す作業中、静かな興奮と感動に包まれ続けました。美しい知的冒険に満ちた恋文のような作品です。手稿譜の上には、「Pour La Belle [J]」…と記されています。同時に若い大家がこの作品で少年ジャン・クリストフが嗅ぎ取った和声の危険な崖を歩く姿があります。ほとんど知られていない作品なので、すこし専門的な解説をゆるしてください。和声が、後のベートーヴェンにとって大切な調性「変ホ長調」で積み重ねられます。そしてその度に崩されます。「その今いたはずの世界」としての調性は突然短二度下の二長調で否定されます。もちろん一番遠隔の調です。「いままでいた世界はナポリの調域だったのだよ！」という普通には考えられない展開を生みます。全体は厳格なソナタ形式なので、本日はソナタの様式に則って提示部の反復を試み

ます。展開部では、先輩のヘンデルのような一音の調性の読み替えではなく（ヘンデルは中全音律に近い音律とされる）、三音全部をフラットからシャープに読み替える次元の転換から始まります。このことから、ベートーヴェンの音律は私のギターのヤング・バロティに近いものであったことが想像されます。ここには彼の最晩年の音楽があります。音楽そのものは最後までなんの立った形もなく麗しい人への「調性の霧」のなかにあります。曲の最後にその「麗しいJ」の旋律が刹那として現れます。それは後世のベルリオーズの幻想をさえ思わせます。

二 ソナチネ 八長調 W.O. 44a ギター独奏

この小品の隠された構造はまだ気が付かされていないようですので、その部分に焦点をあててお話します。一七八七年ベートーヴェンは尊敬するモーツァルトに面会に行ったと伝えられます。前年にブライトコップ社から、今ではK.310として知られるモーツァルトのボヘミア風ソナタが「チェンバロソナタ」として出版されました。そのモーツァルト作品の第一主題は当時としてはありえ

ない構造をもっていました。主和音と固執主音上の属七
「だけから成り立っているのです。後のベートーヴェンの
発言「自分に減七和声さえくれればなんでも書ける」の
源泉はここにあるのでしょうか。この「愛らしい」ロンド
風ソナチネはモーツァルトへの尊敬に満たされています。
なぜなら、このモーツァルトのソナタのテーマが旋律も
減七の和音も「そのまま」に小品のなかにコラージュさ
れているからです。なぜこの単純な尊敬の引用に学者が
気づけなかったのか？ たぶんモーツァルトの元の作品
を後のピアノ出版譜で見ているからではないか、と想像
します。この作品はベートーヴェンと彼が敬愛したモー
ツァルトとの合作なのです。

三 主題と五つの変奏 ニ長調 W.O. 44b

ギターとチェンバロ

一瞥には単純そうな旋律と五つの変奏です。テーマは
スケルツァンドです。のちに大家が革新した「交響曲の
メヌエットをスケルツォに」の萌芽です。スケルツァン
ド：諧謔はベートーヴェン（教室の肖像から真面目だと信

じられています。が……)の大切なテーマです。諧謔に含まれ
る「孤独」が彼の見つめていたものではないでしょう
か？ ジャン・クリストフのように。そして、この「ス
ケルツォと変奏」という様式は、このあと僅か十年で
ベートーヴェンを尊敬した鬼オパガニーニに受け継がれ
ました。ベートーヴェン自身には晩年の大作「ディアベ
リ変奏曲」につながる道です。

四 ソナチネ ハ短調 W.O. 43a 箏とギター

親しげな旋律だけのこの作品は、ほとんど旋律の現れ
ない麗しい「J」の幻想と対照的です。この旋律は「喜
びの歌」以上に国境や民族を超えてしまった歌です。た
ぶん世界中のどの楽器で演奏をしても「ひたむきな恋し
さ」は共通の情感として成り立っています。日本の箏も
これに適した楽器であることを聴いていただけだと思います。
まず。ここに私はこの若い大家の「凄さ」を感じます。
ベートーヴェンと箏、この歌にはなんの違和感も私は感
じなかったのです。むしろ現代の金属音のマンドリンよ
りははるかに心の歌として聞こえました。

機械オルガンのためのアダージョとスケルツォ

箏とチェンバロ

機械オルガンはフランスからスイスに渡ったユグノー教徒などの精密機械細工師によって作られた自動楽器です。このような楽器のためにはベートーヴェンの先輩であるモーツァルトも名作を書いています。なぜこの無機の機械のために二人の大家は名作を書く動機があったのか：訝られるかもしれません。音楽史的には「収入」のため、と記されていることが多いのですが、それだけのはずはありません。音楽家は恥じらいから、本心をいわず「金のためさ」、そんな言い方をすることがありますが、それが本心ではないことが多いのです。私（西垣）が独断で申しますと、作曲家の多くは特定の楽器ではなくて自らのイメージの中で「中間言語」とも言える架空の楽器を抱えています。その傾向が顕著な作曲家は、大バッハであり、近代ではラヴェルだと言えます。ベートーヴェンやモーツァルトもその中間言語のまま公表できる「機械オルガン」に思いを寄せた、と感じます。この楽器の音楽には肉体や感覚の制限から解放された大作曲

家の姿が彫琢されます。

C'est un honneur infini pour nous, membres de l'Association Romain Rolland de France d'être présents aux côtés de l'Institut Romain Rolland du Japon, pour ce concert unique. Il n'était pas de plus grand hommage pour célébrer Romain Rolland, que d'imaginer l'harmonie des instruments d'Orient et d'Occident pour faire entendre Beethoven. «Nous communions en lui, nous de tous les peuples de la terre. Il est le symbole rayonnant de la (...) fraternité humaine» (R.R. *Beethoven*. 1927)

Présidente de l'association Romain-Rolland Madame
Martine Liégeois

(西垣正信 記)

ロマン・ロラン研究所設立四五周年に寄せて

フランスロマン・ロラン協会会長 マルティーンヌ・リエジヨワ

シツシユ 由紀子 訳

フランスのロマン・ロラン協会を代表して京都に御招き頂き、ロマン・ロラン研究所設立四五周年記念行事に参列できますことは、私たちにとって、この上なき名誉で幸福なことと存じます。当協会名誉理事長であるベルナル・デュシャトレ教授からも、友情とお祝いの言葉を託されて参りました。教授は、以前、ロマン・ロラン研究所のご招待を受けこの地で講演しましたが、その折りに歓待して頂いたことを忘れたことはありません。他の多くの会員たちからも、日本でロマン・ロランの思想を今に伝える皆様の素晴らしい活動に対する敬意の気持ちを託されました。

ロマン・ロラン協会の設立は一九九九年に遡りますが、ロマン・ロラン研究所とブレーヴ村との間では、一九九〇年から交流があったことは、村長のジェラル・ナルテュス氏から伺っておりました。彼は私たちの交流を望み、二〇〇一年には、私たちが知り合うきっかけをつくってくれました。当時、エイ子さんはある構想を温めていらして、それを私に伝えて下さったのです。それは、宮本正清先生とロマン・ロランの未亡人であるマリー夫人との間の手紙のやり取りに関することでした。

二〇〇二年は、私たちが初めて出会った大事な年です。エイ子さんを、パリのロマン・ロランゆかりの高

等師範学校にお迎えしました。今は亡きナルテュス及びデルヴォー両氏も設立後間もないロマン・ロラン協会の会員たちと共に、その場にいらっしやいました。エイ子さんが、スピーチの中で断固として戦争を弾劾する姿勢に圧倒されたことを今でも覚えています。

二〇〇四年には、ヴェズレーにて、第一回『ロマン・ロラン国際デー（国際平和シンポジウム）』が開催され、西成勝好先生に御参加頂きました。先生は世界中を駆け回っていらっしやいますが、定期的に、手短かながら深い考察を含んだ友情のサインを送って下さいます。

二〇〇六年、神戸で教鞭をとるデイ・エイ・シツ・シュ先生が、高等師範学校に帰って来ました。先生は、ロマン・ロラン同様に『ユルム街の僧院（高等師範学校）』の卒業生で、「日本におけるロマン・ロラン受容史」という題で講演されました。以来、この講演はリファレンスになっています。講演会にはエイ子さん始め、京都の友人の方々も参加頂きました。講演会後は、イワノヴィッチ夫妻（郁子さん・ピエールさん）によるベートーヴェンの演奏会で素晴らしい宵の幕が閉じま

した。

二〇〇七年には、私の娘のアンヌ・ローレルと夫のオリビエを京都に迎えて頂きました。彼らもまた、その際に歓待して頂いたことを忘れたことはなく、娘は、「自国から九千キロも離れた所で、ロマン・ロランの存在がかくも大きく敬愛されていることに感動した」と、『カイエ・ド・ブレーヴ』に寄稿しています。

同年、パリのオペラ座では歌舞伎が上演され、三味線奏者の今藤政太郎師匠とお会いする機会を頂きました。今藤師匠のことは、また後ほど触れたいと思います。

二〇〇八年の『ロマン・ロラン国際デー（国際平和シンポジウム）』のテーマは「ロマン・ロランと平和という仕事」でした。エイ子さんの率いる大勢の日本の方々をお迎えしました。マドレーヌ大聖堂での神谷郁代先生の奏でるベートーヴェンは特別なものでした。大聖堂の中はあまりにも寒く、神谷先生がピアノに手を置かれる直前まで、夫は彼女の両手を温めていました。尾埜善司先生が、宮本正清先生の詩を朗読されたことも深い感動を与えました。

エイ子さんは、その四年後の二〇一二年にもヴェズレーを訪れ、国際デーに参加されました。この年のテーマは、「ロマン・ロランと音楽」でした。エイ子さんは『ピエールとリュース』が、先述の今藤政太郎氏の手でオペラに演出され上演されたことを紹介されました。聴衆は、「ピエールとリュースの悲劇を戦争の犠牲となった全ての人たちへのレクイエムにしたかった」という演出家の意図を知ったのです。

さて、年を追いながら私たちの交流を辿ってきましたが、二〇〇一年以来、私たちは常に連絡を取り合い、お互いの活動について報告を欠いたことはありません。私たちが、フランスにおいて、ロマン・ロランの思想が再評価されるように努めていることは皆さんもご承知だと思いますが、私たちも、日本における皆さんの、幅広い活動（講演会・コンサート・出版）特に、みず書房から刊行されたベルナル・デュシャトレ著『ロマン・ロラン伝』邦訳）を敬意の念と共に伝えていきます。

『ユニテ』各号の目次の仏訳を読むと、筆者それぞれ

れの熱意と共に、ロマン・ロランの作品に対する親密で学術的なアプローチが伺われます。タイトルの先にある文章をフランス語で読めないことにフラストレーションが募りますが、フランス語訳のお陰で、内容を伺い知ることができると感謝致します。

二〇一六年四月発行の『ユニテ』には、長谷川和宏氏の「テロのときのパリ」が掲載されました。襲撃現場の位置が示された地図と襲撃現場に捧げられた花の写真には胸が締め付けられ、筆者が寄せる共感の思いに涙が込み上げました。

ロマン・ロラン研究所の皆さん、日本でロマン・ロランの名をこれ程高く掲げていらっしゃる皆さんは、私たちのお手本です。最後に、改めて研究所設立記念にお祝いを申し上げます。ロマン・ロラン研究所の益々の御発展と、その魂であるエイ子さんには、末長くご健勝であられますようお願いしています。

（原文は巻末に掲載しています）

ロマン・ロランとベートーヴェン ベートーヴェン百年祭前後の献辞

植松 晃 一

研究所の読書会では、「ロランとベートーヴェン」に関するものを中心に取り上げると以前のご案内にありましたので、私も一年間を総括する意味で、一九二七年のベートーヴェン百年祭に関連するアイテムを何点かご紹介したく存じます。

写真① 自筆献辞入り『戦いを超えて』

(一九二六年 アルバン・ミシエル社刊 第一〇九版)

「若きベートーヴェンは『何よりも自由を愛する!』と言いました。年を重ね、苦境に立たされたベートーヴェンは『迷宮に幽閉されたダイダロスは、それを抜け出して空を高く舞う翼を発見したではないか。私もまた、

そのような翼を見つけよう!』と書きました。『自由』こそ、彼のモットーです。一九二七年一月(ベートーヴェニアンの年に)」

写真② 自筆献辞入り『ベートーヴェンの生涯』

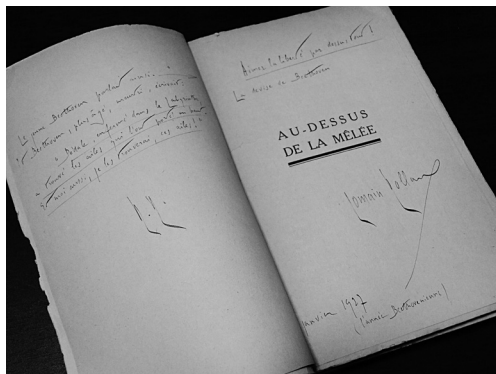
(一九二六年 Rotapfel-Verlag 社刊 ドイツ語版)

「ベートーヴェンは正義と誠実の師です。一九二七年三月二八日 ウィーンにて」

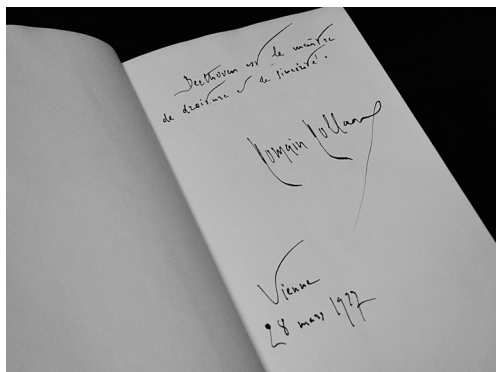
写真③ 自筆献辞入り『ベートーヴェンの生涯』

(一九二三年 アシエット社刊)

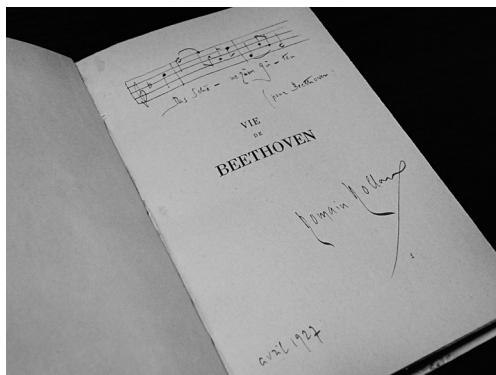
「善くのみ美 (Das Schöne zum Guten) (ベートーヴェン



写真①



写真②



写真③

のために) 一九二七年四月」

* ロランの自筆で楽節が書き込まれています。ロランによれば、ベートーヴェンは「善への美」という言葉を「日常の祈禱句」として繰り返し唱えていたそうで、色々な旋律をつけて友人たちにも贈っていたといいますが(参みせず書房『ロマン・ロラン全集二五』所収「第九交響曲」
蜷原徳夫・北沢方邦訳)。

これだけを見ても、ロランがベートーヴェンという人物のどこに共感していたかが分かるような気がします。

「自由」の意味は人それぞれだと思います。私にとつて自由とは「自らに由来する」という意味です。自分に起きる良いことも、悪いことも、すべて自分が源泉だと受け止めて生きることです。うまくいかないことを環境や他人のせいに行っているとき、その人には自由も、成長も、前進もないと痛感しています。こうした考えを念頭に、詩誌『コールサック』(コールサック社発行)に次の一詩を投稿し、掲載していただきました。

自由

家族から自立し
友人から自立し
師匠から自立し
宗教から自立し
社会から自立し
時代から自立し
偽りの自分から自立しながら
家族への責任を果たし
友人への義理を通し
師匠との誓いを達成し
宗教に生命を取り戻し
社会に安らぎをもたらし
時代から悲惨をなくし
本当の自分を生き抜くこと
それが 自由

(詩誌『コールサック八六号』二〇一六年六月発行)

ロランは『クレランボー』の「はしがき」で、「他の人々の役に立つことを望むものは、まず自由でなければならぬ」「自由な魂、しっかりとした性格、それこそは今日の世界にもっとも不足しているものである」（みすず書房『ロマン・ロラン全集五』所収・宮本正清訳）と書きました。現代も自立した自由な魂が不足しているように思えてなりません。

さらに一八八八年の日記には「ぼくにとつて魂の自由こそ、この世のなによりも貴重なものなのだ。ぼくは自分の魂を見いだす。そしてそれで他の人びとの魂をみたくす。他の人びとを不滅にしてやりたいと思う。ぼくに生きた『神』を吹きこんだところのものを、他の人びとの魂にも移し入れたいと思う」（みすず書房『ロマン・ロラン全集二六』所収「ユルム街の僧院」嵯原徳夫・波多野茂弥訳）と書いています。

世の中は終末の予感に満ちているように思えますが、少しでも世界の進む方向を変えるために、できるだけ良い言葉を、良い思想を、もっとほんとうのことを知りたいたし、「他の人びとの魂」にも届けられたらと願って

ます。「不幸な人類のため」「未来の人類のため」に働き、人類に善行をいたし、人類に勇気を鼓舞し、その眠りを揺り覚まし、その卑怯さを鞭うつこと」（みすず書房『ロマン・ロラン全集一四』所収「ペートルヴェンの生涯」片山敏彦訳）は、ロランを愛する一人ひとりが常に念頭に置くべき生き方だと信じています。

二〇一七年も皆様のますますのご活躍をお祈りしております。

（賛助会員・一九八〇年生まれ）

父のこと

森 本 素世子

四月初旬、宮本エイ子様からお電話をいただき、昨年一月六日に八八歳で他界しました父森本達雄について、何か書くようにとのお言葉をいただきました。生前、父はよく私に、まるで歴史物語のように、自らの祖父母や両親のこと、幼馴染みのこと、長じて、父がつねに生涯の僥倖であったと感謝を込めて語っていた、宮本正清先生はじめ、片山敏彦先生、蛭原徳夫先生、宇佐見英治先生や、父が「インドの父」と慕ったK・クリバラーニ氏との出会いやその深遠な魂の絆について話してくれたものです。しかしながら、私は父にとって、決してよきボズウエルとはなり得ず、いつでもねだりさえすれば、それらの心躍る美しい物語を何度でも（いつまでも）聞か

せてもらえるものと思っておりました。

それゆえ、今あらためて父のことを書こうとすると、私の記憶にあるそれらの物語はあまりにも断片的で、まとまりのないものであることに気づき、愕然としています。父が逝ってしまったってまだ半年、父の書斎は在りし日のままで、そこに残された、書きかけの原稿用紙、多くのメモ書きや日記、手紙の束をじっくりと手に取って、父の魂の軌跡をたどるには、まだ時が必要に思えます。

それでもなお、いくつかの偶然（それはもはや必然であったのでしょうか）に導かれ、片山先生や宮本先生と出会いは、また、ロマン・ロランの「ユニテ」の思想・精神に触れたことで、父の人生がどれほど歎びに満ちた、豊

かなものになったかを思うとき、『ユニテ』に父の思いを書かせていただくことは、父にとつてもこの上ない喜びであろうと思います。

父は生涯、ガンディーとタゴールを愛し、その存在と思想から、生きる喜びと、励まし、慰めを得たと申します。と同時に、父は、ガンディーとタゴールを通して、片山先生が『泉のこだま』に書かれた「国を問わず時代を問わず、魂の直感がよしとみとめ、美として讃嘆せざるにいられない声を聴き、その声とともに理解し創造するところに、一つの大きい円環の存在が見えて来ます」という言葉に込められた真の声に真摯に耳を傾け、東洋・西洋を超えた魂の照応を見つめてきたように思います。もちろんそこには、ロマン・ロランとタゴール、ガンディーの出会いと友情の絆があり、そこから生まれ広がる精神の円環がありました。それゆえ、父がガンディーやタゴールのことを語ってくれるときには、その円は幾重にも重なって、より大きな輪を成し、ゲートルやヘッセ、モーツァルトやベートーヴェン、バッハにまで広がっていくのでした。

父と散歩をしていて、夕暮れのあまりにも美しい空を見ながら、ヘッセの水彩画のようだねと、歩を止めて二人でじつとたたずんでいたことを思い出します。

晩年、父は、あと二つ終えたい仕事があると申ししておりました。一つは、タゴールのアンソロジーで、これは、父自身、かなり体力がなくなり、また執筆中、最愛の母を亡くした、その悲しみのなかで完成させたもので、父が亡くなる一年前の二〇一五年五月一九日（奇しくもこの日は父と母の結婚記念日でした）に『原典でよむ タゴール』として岩波書店から出版されました。もちろんこの書のなかには、タゴールとロマン・ロランの対談が一章もうけられております。もう一つは、ガンディーが愛唱してやまなかったという『バガヴァッド・ギーター』の精髓の書である『ギーター』書簡の翻訳でした。しかしながら、この仕事は、父がもはや自宅のベッドから立ち上がることができなくなり、ベッドに取り付けたテーブルの上で、それでもなお最後までこつこつと校正していたもので、再校原稿の表紙には、弱々しい筆跡ながら「完」という文字が書かれておりました。今、私はその

校正の文字を赤でなぞっているところです。

こうして父は、この二つの仕事を済ませ、タゴールの「いま 仕事を終える秋ときが来たかのようにだ、そして あなたの芳しい仄かな薫りをわたしは大気のなかに感じとっている」という詩心そのままに、最期の時まで穏やかに過ごしました。

ただ一つだけ、わがままは承知のうえで、私は、父がシャンティニケトンで生活をしていた頃、まだガンディーやタゴールのことを直接知っていた人々と出会い、彼らから伺った貴重なお話を、もう一冊まとめておいてもらいたかったなどと考えてしまいます。

先にも書きましたように、父は、モーツァルト、ベートーヴェン、バッハを愛し、時には涙ぐみながら、それらのレコードを聴いておりました。しかし、父が最後に聴きたかったのがどの曲だったのか、私にはとうとうわからず、私は、自分が幼い頃、眠る前に何度も何度もかけてもらった、シユヴァイツァーのオルガン演奏で、バッハの Chorale-Preludes と、ブラームスの子守歌 Wiegeliied をかける「ソング」父への心からの感謝を贈

りました。そして、Wiegeliied の最後の Gute Nacht! の美しい響きが、父を新たな精神の世界に導いてくれたと信じています。

長きにわたり、皆様より賜りましたご厚誼に深く感謝いたします。

森本達雄 略歴

一九二八年和歌山市に生まれる。同志社大学神学部卒業。インド国立ピツシヨ・パロテイ大学准教授。名城大学教授を経て、同大学名誉教授。

二〇〇九年、瑞寶中綬章受章。

二〇一六年一月六日、心不全のため死去。八八歳没。

著書に、『インド独立史』（中公新書）、『ガンディー（人類の知的遺産）』（講談社）、『インドのうた』（法政大学出版局）、『ヒンドゥー教—インドの聖と俗』（中公新書）、『ヒンドゥー教の世界』（上・下、NHK出版）など、訳書に、ガンディー『わたしの非暴力』（全二巻、みすず書房）、ネルー『忘れえぬ手紙より』（全三巻、みすず書房）、『タゴール著作集』（全二巻、編集・共訳、第三文明社）、N・チヨウドリー『ヒンドゥー教』（みすず書房）、『ガンディー 獄中からの手紙』（岩波文庫）などがある。

短 信

*ロマン・ロラン生誕一五〇年記念事業がフランスはもとよりインド、ロシアで大々的に展開されました。講演会、シンポジウム、コンサート、出版、映画など。わたしたちの京都では財団設立四五年の年と重なり、ご報告しておりますように朗読会、講演会、コンサートを開催いたしました。コンサートには在京都フランス総領事兼アンステイチュ・フランセ関西の館長ジャン・マチュー・ボネル氏がご臨席くださいました。引き続き会場を移してのレセプションでは祝辞を頂戴いたしました。そのなかでフランス政府から宮本エイ子理事に勲章を授与すると告げられました。

*大佛次郎記念館（横浜）　ロマン・ロラン生誕一五〇年を記念するテーマ展示会（会期二〇一六年一月一七日―二〇一七年三月二日）がありました。大佛に大きな影響を与えたロマン・ロラン。その翻訳や彼が愛したフランスを辿った展示。この記念年に招待しているフランスのロマン・ロラン協会会長リエジヨワ夫妻に宮本理事が同行、西成理事長、横浜在住の大川起示子さん、安木由美子さんも合流、一緒に展示を見学しました。

*『小尾俊人の戦後』——みずず書房出版の頃—— 宮田昇 著　二〇一六年四月、みずず書房から出版されました。敗戦の夏に復員、その暮れにみずず書房を立ちあげた小尾俊人。『夜と霧』に至るまでの試行錯誤と奮闘、時代向き合うその人となりを親交の深かった著者が描く。

*濱田 陽さん　中公叢書『日本十二支考』（中央公論新社）二〇一七年一月出版されました。

個性あふれる十二支動物が導き手。生きとし生けるものが織りなす豊饒な日本文化の時空への旅。画期的な日本文化論。

*今西良枝さん　『念ずれば花開く』坂村真民著のなかにもロマン・ロランのことが出てきた喜びをお伝えしたいと思ひ認めました。『ユニテ』という言葉に引き寄せられて再読してみますとまるで初めて読んだように感じられ、しかも一字一句が身体に沁み込むようでした。その日は七月七日でした。その後、繰り返し読み九月二日に写してみました。読書会での『魅せられたる魂』が思い出されました。川の流れるように時の流れの一瞬を大切に過ごしている昨今です。九月一〇日に「宇治田原九条の会」が発足し、参加することができました。その時もロランの会の良い影響

を感じることができました。九月一四日の朝はドラマティックでした。「一緒にやろうよ」(京都新聞)の記事が飛び込んできて、メールも届きました。私もいつもあの部屋にいたような気持ちになりました。記念朗読会のご案内もいただき心動くのですが、こちらの田原祭りと重なり断念しました。記念講演会を聞かせていただけたらいいなと思っています。日々の生活を通して平和を常に考え続けたいと思います。

『念ずれば花開く』の二二五―二二九頁まで「二度とない人生だから」タイトル(ユニテ)部分をきれいな手書きで写経したように、そのお心が投影した写しを添付。

*佐久間啓子さん 一〇月、ロランの生誕地とお墓詣をしました。パリ・ベルシー駅から目的地クラムシーの国鉄時間表、切符、乗り継ぎ駅、タクシーのそれぞれの料金などの最新の情報を送ってこられました。無人駅セルミゼールの自販機でクレジットカードによって買われたチケットや宿泊先の元修道院の絵ハガキなども同封いただきました。

*安木由美子さん 昨日(二月二六日)無事に草径庵(本

とお茶ときどき手紙)本の会「一周年記念の読書会を終えることができました。参加者は五名と少なめでしたが、ベートーヴェンを聴いたり、ロランとマルタン・デュ・ガールの話になったり、はたまた清原章夫さんも話題にのぼったりと、普段より時間を延長しての楽しいひとときとなりました。西成理事長からのメッセージはプリントして皆さまにお配りし、山折先生のご講演の様子は小西卓明さんが写真付きで説明してくださいました。参加者にとって、ロマン・ロラン研究所がグンと身近になったような豊かな時間でした。今年、数回お引き受けたトークイベントでは、必ずロラン研究所の読書会の体験を話してまいりました。草径庵ができる過程で大きな影響を受けたことは間違いありません。ロランの紡いでくれたご縁に感謝しつつ、微力ながら、ロランの作品と思想に基づいて、これからも横浜で活動が続けてまいりたいと思います。

*ロマン・ロラン研究所の活動が京都新聞九月一四日朝刊で、ロマン・ロラン生誕一五〇年と財団法人四五年記念コンサートが朝日新聞で一月二二日紹介され反響を呼びました。読書会例会についても各新聞の情報コーナーでお知らせいただいております。

十 追悼十

森内 富美子さん

二〇一六年九月八日ご逝去、九八歳。合掌。

「ロマン・ロランに魅せられた義母」

二〇一六年九月八日の昼下がり、義母、森内富美子さんが静かに息を引き取りました。九八歳の大往生でした。夫より一〇年も長く一緒に暮らした義母でした。古典文学、特に万葉集をこよなく愛し、日本古代史、中国史にも興味を抱いて、現地向けに出向いたり、講演会に出かけたり、音楽にも興味を持って、関西圏のみならず、東京や長野までも演奏会に出かけるといふ活発な義母でしたが、新聞で「ロマン・ロラン研究所」の記事を見つけ、早速、京都までバスを乗り継いで行ってきた、と目を輝かせて報告してくれた日を思い出します。その後は、園田高弘氏の演奏会からはじまり、研究所主催の演奏会、講演会にもお供するようになって、私もアッシーとしてだけではなく、若き日に興味深く読んだ『魅せられたる魂』や『ジャン・クリストフ』がまた身近に蘇りました。現在「ロマン・ロラン研究所」とつながっておりますのも義母のおかげです。良いご縁をいただき、心より感謝でございます。
(森内依理子 記)

森本 達雄さん

二〇一六年一月六日ご逝去、八八歳。

長年、理事としてご尽力くださり、ご専門のインドについて、

ガンデイやタゴールのお話をたびたびしてくださいました。感謝とともにご冥福を祈ります。

本郷 美智子さん

二〇一六年一月一九日心臓病にてご逝去、九一歳。

半世紀のご厚誼をいただきました。一人暮らしでしたが近所へ行くのもタクシーを使い敬老乗車証も介護保険も一切使わず日常生活を過ごされました。新聞二紙を毎日すみからすみまで購読され、自分の生き方を貫かれました。就寝中静かに旅立たれたようでした。シンクロスイミンクの草分けですが宮本正清への敬意から絶えずご協力、ご尽力くださいました。『魅せられたる魂』タイトルを愛蔵されていた虹染め作家、本郷太田子書による短冊掛け物を亡くなる直前寄贈くださいました。合掌。

狩野 直禎さん

二〇一七年二月七日ご逝去。(京都女子大学名誉教授・中国

古代史) 八八歳。

関西日仏学館設立八〇周年記念講演として「中国研究を通しての日仏交流」―京大シノロジの創始者狩野直喜の場合―と題して関西日仏学館とロマン・ロラン研究所の共催事業のもとお話しくださいました。「ユニテ」35号収録。今年関西日仏学館(アンステイチュ・フランセ 関西)設立九〇年を迎えますが、貴重なご講演でした。感謝の念とともにご冥福を祈ります。

財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書

設立者・初代理事長 宮本 正清

ロマン・ロラン（一八六六―一九四四）は、日本人にもっとも強く深い、精神的、道徳的影響を与えたヨーロッパの芸術家の一人であります。武者小路実篤、志賀直哉等の白樺派の人々をはじめ、高村光太郎、尾崎喜八、大仏次郎、小島政二郎その他の作家、音楽家、画家、彫刻家、さらに科学者、実業各方面にいたるまで、その青春時代をロマン・ロランの思想、芸術の光に照らされ、人格的感化陶冶を受けた者は枚挙にいとまないであります。

しかし、ロマン・ロランの眞の偉大さと、存在価値は、たんに文学的分野にとどまるのではなく、むしろその博大な人間愛にあります。人種、文化、文明等のあらゆる国境を越えて、眞に世界的、人類的である彼の愛の精神は、「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」その他の小説、戯曲、伝記、文学的、音楽的、歴史的研究のみならず、現代社会のあらゆる不正と戦うために、人権と自由を擁護するために、多くの政治的、社会的論争を生漕つづけました。さらに、ロランは、東洋と西洋、ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、人類の進歩と平和のために、いかに必要であるかを説き、われわれの文明を墮落と頽廢から救いうる唯一の道は、アジアとヨーロッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、各国民がユニークな文明、固有の伝統を尊重、保存して、人類全体の偉大な共有財産として、現存のそれに勝る大文明を創造すべきだと言っております。ロランは、インドの哲学、宗教を研

究した数巻にわたる著述の中で東洋の精神のもっとも深遠で高邁なものは、西洋のそれと本質的に異なるものでないばかりか、両者がほとんど完全に一致していることを実証しております。このような思想家、芸術家、偉大な人間が、わが日本において、半世紀以上にわたって、変ることなく、今もなお、青年層に親しまれ、愛読され、尊敬されていることは、日本のために、喜ぶべきことと信ずるのであります。

一九七〇年十二月

◆現在の主な三つの活動

ロマン・ロランセミナー

公開講座

- 講演会
- 読書会・研究会
- 機関誌『ユニテ』発行

◆ロマン・ロラン研究所賛助会員について

- ロマン・ロランの著作に感動、また
- 彼の周辺の芸術家たちに興味、
- あるいは、ロマン・ロラン研究所活動に共感
- いずれの理由でも結構です。皆様のご賛同をお待ちいたしております。
- 特典Ⅰ①機関誌『ユニテ』の配布。②賛助会員の参考に資する情報、資料等の提供。③公開講座無料。
- 会員Ⅰ一般賛助会員は年会費一口五千円から。特別賛助会員は年会費十口以上。

| | | | | |
|-------|---|-------|---------------------------------|-------------------|
| 4・19 | (財) ロマン・ロラン研究所設立二十周年記念 レクチャー・リサイタル 杉田 谷道 | 10・15 | 『魅せられたる魂』を語る(後) | 重本恵津子 |
| 6・4 | ベートーヴェン後期ピアノ・ソナタの夕べ ロマン・ロランとベートーヴェン 青木やよひ | 1・28 | いま、ロマン・ロランを語る | 尾埜 善司・今江 祥智 |
| 9・27 | ロマン・ロランとデュアメル 村上 光彦 | 9・9 | ロマン・ロランと音楽 | 中野 雄 |
| 10・25 | ロマン・ロランの思想の二面性 兵藤正之助 | 10・14 | 神秘と政治 ロマン・ロラン、その思索と行動の あいだ | B・デュシャトレ 河野 健二 |
| 11・29 | 初めにロマン・ロランあり 岡田 節人 | | ロランとフランス革命 自然科学とゲーテ | 岡田 節人 |
| 一九九二 | | | ロマン・ロランとドイツ音楽 ベートーヴェン、デュカ他作品 | 岡田 暁生 |
| 6・26 | (大洋感情)と宗教の発端 岩田 慶治 | 12・3 | おはなし「ピエールとリュス」と「また逢う日 で」 | 今江 祥智 |
| 9・25 | ロマン・ロランとイタリヤ 戸口 幸策 | | 映画上映「また逢う日まで」(監督 今井 正) | |
| 10・30 | ロマン・ロランの革命劇をめぐって 鶴見 俊輔 | 12・24 | ピアノ演奏…小坂 圭太 | |
| 11・27 | 宮本正清 没後十年記念追悼会 ピアノ演奏…山田 忍 | | | |
| 一九九三 | 静かにやさしき顔 佐々木斐夫 | | | |
| 1・29 | 不思議な静けさ―宮本正清の世界 小尾 俊人 | 一九九五 | | |
| 1・29 | 自伝的諸作品について 佐々木斐夫 | 1・27 | ロマン・ロランと日本人たち | 小尾 俊人 |
| 1・29 | ロマン・ロランの演劇的世界 石田 和男 | 6・2 | 私の歩んだフランス文学の道 | 片岡 美智 |
| 5・24 | ガンディーとロマン・ロラン 山折 哲雄 | 11・10 | ロマン・ロランとR・シュトラウスの周辺 | 岡田 暁生 |
| 6・23 | 『魅せられたる魂』を語る(前) 重本恵津子 | | | |

| | | | | | | | | | | | |
|----------------|-------------|-------------------------|--------------------------|------------------------|------------------|-----------|----------------|------------------|--------------------|--------------------|-----------------------|
| 一九九六 | 6・14 | 11・16 | 11・18 | 一九九七 | 1・17 | 6・6 | 9・19 | 10・4 | 一九九八 | 6・8 | 9・25 |
| ロマン・ロランとの出会いから | レクチャーコンサート | ベートーヴェン…ピアノソナタ 第21番、28番 | 「戦間期のリベラル」経済学から見たロマン・ロラン | 「主体的精神と普遍的人間愛」ロマン・ロランと | 魯迅 | わが青春と一生 | ロマン・ロランと結核の時代 | ピアノとチェロのための夕べ | ロマン・ロランと種蒔く人 | ロマン・ロランと政治的魔術からの解放 | ロマン・ロランと政治的魔術からの解放 |
| 鄭 承姫 | 岡田 暁生 | ピアノ演奏…北住 淳 | 本山 美彦 | 區 建英 | 岩淵龍太郎 | 福田 真人 | 福田 真人 | ピアノ演奏…北住 淳 | 柏倉 康夫 | 柳父 図近 | 柳父 図近 |
| 10・30 | 11・25 | 一九九九 | 6・11 | 12・1 | 二〇〇〇 | 10・13 | 10・13 | 二〇〇一 | 6・23 | | |
| ロマン・ロラン記念コンサート | ピアノ演奏…小坂 圭太 | ロマン・ロランと大佛次郎 | ロランと音楽 | 「日本ロマン・ロランの友の会」五十周年記念 | 「園田高弘ベートーヴェンを弾く」 | 「お話とピアノ演奏 | ロマン・ロランとインドの精神 | ロマン・ロラン没後五十五年と日本 | ロマン・ロランと《老いの豊かさ》 | シンポジウム | （財）ロマン・ロラン研究所設立三十周年記念 |
| | レクチャー…岡田 暁生 | 村上 光彦 | 園田 暁生 | 園田 高弘 | 森本 達雄 | 佐々木斐夫 | 青木やよひ | 今江 祥智 | 尾埜 善司 | 神谷 郁代 | 神谷 郁代 |
| | | | | | | | | | 「神谷 郁代 ベートーヴェンを弾く」 | | |

| | | | | |
|-------|------------------------|--------------|------|--------------------------------------|
| 12・21 | ロマン・ロランとヴィクトル・ユゴー | | 二〇〇四 | |
| | | デイ・デイ・エ・シツシユ | 5・29 | 『きょう』を読む『京都、半鐘山の鐘よ 鳴れ!』 朗読とおはなしの会 |
| 二〇〇二 | | | | |
| 4・20 | ロマン・ロラン記念スプリングコンサート | | 7・16 | おはなし 尾埜 善司 朗読 村田まち子 |
| | ヴァイオリン演奏…ピエール・イワノヴィツチ | | | ロマン・ロラン記念サマーコンサート |
| | ピアノ伴奏…郁子・イワノヴィツチ | | | ヴァイオリン演奏…ピエール・イワノヴィツチ |
| 11・11 | ロマン・ロランの後継者たち | 蛭川 譲 | 9・11 | ピアノ伴奏…郁子・イワノヴィツチ |
| 二〇〇三 | | | | 抗日中国における中仏文化交流 |
| 4・19 | ロマン・ロラン記念スプリングコンサート | | | 中国の知識人はロマン・ロランをどのように評 価したか |
| | ヴァイオリン演奏…ピエール・イワノヴィツチ | | | 内田 知行 |
| | ピアノ伴奏…郁子・イワノヴィツチ | | 二〇〇五 | |
| 5・10 | ロマン・ロランの作品による音楽とレコード | 尾埜 善司 | 1・29 | 現代の法とヒューマニズム |
| | | | | 加古二郎と瀧川事件 |
| | | | | ロマン・ロラン没後六十年記念コンサート |
| 5・31 | 戦争と平和、科学を考える | ピアノ演奏…沖本ひとみ | 6・12 | 梅原ひまり 神谷郁代デユオ |
| | ブリーモ・レーヴィを語る | | | ヴァイオリン演奏…梅原ひまり |
| | | ジル・ド・ジェンヌ | | ピアノ演奏…神谷 郁代 |
| 11・22 | ロマン・ロランを読みながら 今の世界を考える | 解説 西成 勝好 | 6・25 | 生々発展する魂 |
| | | 峯村 泰光 | | ゲートとベートーヴェンそしてロマン・ロラン |
| | | | | 青木やよひ |

- 10・29 交差する肖像
 ロマン・ロランとクロードル
 J・F・アンス
 通訳 原口 研治
 11・13 中国研究を通しての日仏交流
 京大シノロジーの創始者狩野直喜の場合
 狩野 直禎
- 二〇〇六 戦間期ヨーロッパとロマン・ロラン
 山口 俊章
 二〇〇八
 3・8 『ピエールとリュース』を演出して
 今藤政太郎
- 二〇〇七 日本におけるロマン・ロラン受容史
 デイ・デイ・エ・シツシユ
 通訳 シツシユ 由紀子
 6・28 中国におけるロマン・ロランの紹介者・傅雷
 榎本 泰子
- 1・20 琴 笙 ヴァイオリンによる新春コンサート
 大谷 祥子
 9・16 前理事長尾埜先生への感謝の会・記念講演
 ロマン・ロランと日本人たち 尾埜 善司
- 2・3 歌と朗読の会
 豊 剛秋・増永雄記
 10・4 ロマン・ロラン国際平和シンポジウム
 宮本正清の詩『焼き殺されたいとし子らへ』
 「わらい」朗読 尾埜 善司
- 7・21 朗読の会
 第一次世界大戦とロマン・ロラン
 尾埜 善司 ほか 会員
 フランソワ・ラベット
 ロマン・ロランが愛したベートーヴェン
 ピアノ演奏…神谷 郁代
- そして『母への手紙』

- 二〇〇九
- 2・7 朗読の会とピアノ演奏『ジャン・クリストフ物語』
ピアノ演奏…石坂富美子
- 二〇一〇
- 6・13 『日本ロマン・ロランの友の会』六十周年記念
レクチャー・ギターコンサート 西垣 正信
フリー・ツォン ピアノリサイタル 高橋 哲哉
- 9・30 犠牲の宗教への問い
- 10・24 小林多喜二とロマン・ロラン——反戦・国際主義
の文学を求めて エヴリン・オドリ
- 二〇一〇
- 7・24 一九五三年のフランスの子供の絵特別出品(京
都市幼児・児童・生徒作品展及び姉妹都市交歓
作品展)
- 9・29—10・3 都市幼児・児童・生徒作品展及び姉妹都市交歓
作品展)
- 10・9 ピアノリサイタル 神谷 郁代
- 二〇一一
- 2・19 朗読の会 トルストイ没後一〇〇年記念『トルス
トイの生涯』『伯爵様』 会員たち
- 二〇一一
- 11・19 フロイトとロラン——災厄の後に、幻想の前で
小森謙一郎
- 二〇一二
- 1・27 『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会
小尾俊人氏へのオマージュを込めて——京都会場
講演『ジャン・クリストフ』を読みかえして
村上 光彦
- 3・5 ロマン・ロランとみず書房と小尾俊人さん
守田 省吾
- 3・29 朗読の会
スピーチ フィリップ・ジャンヴィエ・カミヤマ
わたちの祭典・ワークシヨップ『魅せられたる魂』
アンネットとシルヴィ 会員たち
『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会
- 3・29 小尾俊人氏へのオマージュを込めて——東京会場
琴とヴァイオリン合奏
琴…大谷 祥子 ヴァイオリン…白須 今
『春の海』 宮城道雄 作曲
『夢のあと』 フォーレ 作曲

7・28

朗読の会『魅せられたる魂』

アンネットとシルヴィ

於 ロマン・ロラン研究所

10・20

ロマン・ロランと賀川豊彦

濱田 陽

二〇二三

ヴィヴエーカーナンダ生誕一五〇周年記念

6・22

スワームイー・ヴィヴエーカーナンダの生涯と
メッセージ

スワームイー・サティヤローカーナンダ

〈朗読とピアノ〉 オマーージュ宮本正清

7・6

〈朗読〉『戦時の日記』『ジャン・クリストフ物語』

詩集『焼き殺されたいとし子らへ』

朗読 会員たち

〈ピアノ〉

岡田 真季

作曲 ポール・デュパン

曲目 『ジャン・クリストフ』

11・16

世界遺産ヴェズレー ロマネスク芸術の宝庫

アンドレ・アンジェイ・グルシエフスキ

二〇一四

9・26

シター演奏と朗読

シター演奏

朗読 『ピエールとリュース』など

中川 啓子

11・1

第一次世界大戦一〇〇年とロマン・ロラン没後七〇
年記念 I・F〈読書の秋〉共催

第一次世界大戦下の知識人——アランとロマン・

ロラン

久保 昭博

二〇一五

9・19

戦後七〇年と憲法九条の意義

曾我部真裕

11・28

ロマン・ロラン〈聞き手として〉証人として

『ヴェズレー日記（一九三八—一九四四）』をめぐ
る考察

デイデイエ・シツシユ

通訳 シツシユ 由紀子

二〇一六

ロマン・ロラン生誕一五〇年&財団法人設立四五周年纪念事業

10・8

朗読会 読んで聴かせる『ジャン・クリト物語』

——ピアノ演奏付き——

10・29

講演会 ガンディー&ロランの存在から今の世界
を読み解く

宗教学者、山折哲雄先生に聞く

朗読 村田まち子ほか会員

ピアノ 岩坂富美子

山折 哲雄

聞き手 濱田 陽

二〇一七

1・28

コンサート 箏とギター、ヴァイオリンとチェン
バロで聴くベートーヴェン

大谷 祥子、西垣 正信

大谷 玲子、塩地加奈子

会場 金剛能楽堂

レセプション 京都ガーデンパレスホテル

二〇一六年度 賛助会員、寄付者名簿 (アルファベット順・敬称略) *特別会員及同等寄付者

- 安倍 道子 有馬通志子 シツシュ・D・由紀子
 堤中 健二 藤田未来子 福田 幸子 福田 由美
 古家 和雄 古田 武司 権 英子 五島 清子
 長谷川和宏 *長谷川治清 早川工務店(早川 友一)
 濱田 陽 林 次郎 林 千恵子 日野二三代
 柘屋 (一財)本願寺文化興隆財団理事長(*大谷 暢順)
 本郷美智子 位田 隆一 池垣 勇 今井 香子
 今西 良枝 *稲畑産業株式会社(稲畑勝太郎)
 *稲畑 勝雄 石川 梢一 *伊藤 朝子 井土 真杉
 井上 幸子 岩坪嘉能子 神谷 郁代 狩野 直禎
 加藤富美子 河合 綾子 木下 洋美 清原 章夫
 *金剛 育子 *金剛 永勤 小西 卓明 久保 久子
 黒柳 大造 草場内科医院
 京都外国語大学 松田有美子 峯村 泰光
 *宮本エイ子 森本 達雄 森内織物株式会社
 森内富美子 *森内依理子 守田 省吾 村上 葉
 室谷 篤男 村田まち子 村山香代子 永易 秀夫
 永易秀一税理士事務所 永田 和子 中村 信子
- 中田 裕子 西村 秀美 西村七兵衛 *西成 勝好
 西尾 順子 野村 庄吾 乗金 瑞穂 能田由紀子
 岡部 素行 岡村医院 大川起示子 沖本ひとみ
 奥村 一彦 奥村 令子 *小尾 眞 折田 忠温
 *大谷 祥子 ロマン・ライフ(河内 誠一)
 酒井 保子 坂谷 千歳 佐久間啓子 三友居
 佐々木雅子 佐々木松子 志賀 鍊三 下郡 由
 所司 育代 園部 逸夫 鈴木 明子 高砂子通子
 田間 千晶 谷口 景子 谷口 良則 田代 輝子
 田谷 昭夫 徳永 勲保 東野 孝人 月ヶ洞晶子
 上原 栄子 植松 晃一 上西 妙子 馬木 絃子
 梅田 菊代 梅原 ふさ 和田 義之 八木美佐子
 安木由美子 山口 俊洋 山口 千鶴 山本 和枝
 山下 雅子 柳父 園近 柳田 基

寄贈図書

フランスロマン・ロラン協会

- 1、冊子 *Cahier de Brève* 38, 39
- 2、Roman Rolland *Vie de Beethoven* présentation de Jean Lacoste Edition Bartillat 2015
- 3、*François Sanzary de Brève Association Romain Rolland* 2013
- 4、*Paul Eluard et cahiers d'art Romain Rolland à Vezelay* 2016

大佛次郎記念館

- 1、おさらぎ選書 第二四集二〇一六年 ロマン・ロラン生誕一五〇年記念「大佛次郎とフランス」特集

• 三木原浩史氏「ビエールとリュス」(鳥影社・二〇一六)

• 原夏子氏(新村猛氏)遺族)

「ロマン・ロラン」新村猛 著作集 三一書房

• 黒柳大造氏 緑の杖 三六号 トルストイ協会

• 高橋純氏 抜き刷り「伝説、事実、真実そして／あるいは文学? ロマン・ロラン」高田博厚往復書簡発見に触れて」

小樽商科大学 人文研究 第一三〇輯(二〇一五年二月)

読書会報告

三三七回―三四五回、友の会時代から数えると五二一―五二〇回を終了。

ロマン・ロランとベートーヴェンをテーマとして、『ベートーヴェンの生涯』四月、五月、六月、七月、九月、『ジャン・クリストフ』十一月、二〇一七年二月、三月。
(通年、参加者数二二六名)

一二月例会は「クリスマス音楽」。原則第四土曜日、午後二時―四時。『ジャン・クリストフ』は現在「青春時代」を読んでいます。会場ロマン・ロラン研究所。

『ユニテ』編集を終えて

『ユニテ』44号を今年も無事にお手元へお送りすることができました。例年より刊行が遅れご心配をおかけしましたが、その分、充実した内容になったのではないかと、ホッとしたり喜んだりです。

今号掲載のもの多くは、「ロマン・ロラン生誕一五〇年／財団法人設立四五年」に関連したものになりました。なかでも山折哲雄先生のお話には多くの誌面を割かせていただきました。

「なぜこんなに長期にわたる平和が実現したのか」といふと、暴力のコントロールに成功したということですね、それ以外にない。日本の平安時代と江戸時代に触れながら、山折先生は語られ、その原因を暴力そのものとしての政治権力と宗教的な権威の二元体制にもとめられています。その洞察にもうなずきましたが、それ以上に、暴力のコントロールが性のコントロールと深く結びつき、また食のコントロールとつながっているという山折先生のご指摘には、目から鱗でした。ロランとガンディーの話から、ここまで普遍的かつ生活に根づいた話題を提供して下さった山折先生に、この場を借りてあらためて感謝申し上げます。この視点から、共謀罪や憲

法改正をめぐる今の日本国家の動きを観察してみると、いったい何が見えてくるのでしょうか。

ガンディー『わたしの非暴力』の翻訳などで知られ、ロマン・ロラン研究所でも何度もお話をいただいた森本達雄先生が、昨年十一月六日に八八歳でご逝去されました。森本素世子さまの「父のこと」には、力の尽きるまで精一杯の仕事を続けられた先生の最後の日々が綴られています。心に響きました。合掌。（文責 守田）

ロマン・ロラン生誕一五〇年、財団法人設立四五年の記念事業を無事に終え、機関誌「ユニテ」に収録できましたことはひとえに皆さまがたのご理解とご賛助の賜物であります。心から感謝申し上げます。今後とも何卒よろしくご指導のほどお願い申し上げます。（宮本エイ子）

編集部

| | |
|-------|-------|
| 守田 省吾 | 野村 庄吾 |
| 中田 裕子 | 西村七兵衛 |
| 宮本エイ子 | 清原 章夫 |
| シッシユ | 由紀子 |

eu la joie de recevoir à Vézelay une importante délégation japonaise, que vous conduisiez, Chère Eiko, et d'assister dans la Basilique, à un exceptionnel concert Beethoven par la pianiste Ikuyo Kamiya.

La Basilique était froide et mon mari devait réchauffer les mains de la grande artiste avant qu'elle ne les pose sur le clavier ! Nous avons aussi entendu avec une émotion intense la lecture d'un poème du Pr. Masakiyo Miyamoto par M. Zenji Ono.

Et, quatre ans plus tard, vous reveniez, Chère présidente, à Vézelay, pour les *Journées internationales* 2012. Au colloque, *Romain Rolland et la musique*, vous interveniez personnellement sur l'œuvre de Rolland, *Pierre et Luce*, adaptée en opéra, par Masatarô Imafuji. Vous nous faisiez découvrir ce Maître de Shamisen pour qui l'essentiel était de faire de la tragédie de *Pierre et Luce*, « un *Requiem* pour toutes les victimes de la guerre ».

Je viens de rappeler les dates de nos grandes rencontres, mais depuis 2001, nous correspondons, et nous échangeons, vous et moi, à tous moments, sur nos manifestations réciproques.

Je sais que vous informez les membres de l'Institut, de nos efforts pour faire re-connaître Romain Rolland en France. Et nous, nous répercutons, toujours admiratifs, toutes les actions que vous menez pour promouvoir son œuvre au Japon: manifestations, concerts, éditions (comme celle chez Misuzu, de la biographie de Rolland par le Pr. Duchatelet).

Quand nous lisons les sommaires de la revue *Unité* nous percevons la ferveur qui anime ses contributeurs, leur approche si intime, si savante, de l'œuvre de Rolland. C'est bien frustrant pour nous de nous en tenir seulement aux titres des l'articles ! Mais Mme Yukiko Chiche nous permet d'accéder à certains textes, grâce à ses excellentes traductions, et je la remercie particulièrement.

Et puis je veux vous dire aussi, notre émotion, quand dans votre numéro d'avril 2016, nous avons lu l'article de M. Kazuhiro Hasegawa sur *Paris au lendemain des attentats*, les plans précis qu'il donnait des quartiers où s'étaient déroulés les massacres, les photos des fleurs déposées... Sa compassion faisait monter les larmes.

Chers amis de l'Institut Romain-Rolland, à vous qui portez si haut le nom de Romain Rolland au Japon, et bien au-delà, qui êtes un exemple pour nous, je vous souhaite un bon anniversaire !

Longue vie à vous, à l'Institut, et à Eiko Miyamoto sa présidente, l'Âme de ce lieu.

Madame la Présidente, Chère Eiko,
Cher Katsuyoshi Nishinari,
Chère Yukiko Chiche,
Cher Didier Chiche,
Chers amis,

C'est un immense honneur pour l'Association Romain Rolland d'être invitée à Kyôto, pour participer aux célébrations du 45^{ème} anniversaire de l'Institut Romain-Rolland. Et c'est, pour moi et pour mon mari une très grande joie d'être, ici, parmi vous.

Je vous porte les messages d'amitié et de souhaits d'anniversaire de notre président d'honneur le professeur Bernard Duchatelet. Vous l'aviez invité à donner une conférence dans votre Institut, et il n'a jamais oublié votre accueil.

De très nombreux membres de notre association, sachant que je les représentais à vos manifestations, m'ont chargé, eux aussi, de vous dire leur admiration pour le magnifique travail que vous accomplissez pour faire vivre Romain Rolland au Japon.

Lorsque notre association s'est formée en 1999, j'avais déjà été avertie des liens tissés depuis 1990 entre l'Institut Romain-Rolland et le village de Brèves, par le maire de la commune, M. Gérard Nartus.

Sa volonté que nous travaillions ensemble est à l'origine de nos premiers échanges, dès 2001. Nous nous retrouvons, alors, Chère Présidente, sur un projet que vous me transmettiez, car il vous tenait à cœur: la correspondance entre le professeur Masakiyo Miyamoto et Mme Marie Romain Rolland.

2002, a été le moment fort de notre première rencontre avec vous, Chère Eiko. Nous vous avons reçu à Paris, à l'Ecole Normale Supérieure, lieu symbolique pour Romain Rolland. Messieurs Nartus et Delvaux, amis disparus aujourd'hui, étaient là aussi, aux côtés de membres de notre jeune association. Lors de votre allocution, vous aviez fustigé la guerre et je me rappelle avoir été très impressionnée par votre engagement.

Aux premières *Journées Internationales Romain Rolland* que nous organisons à Vézelay, en 2004, c'est M. Katsuyoshi Nishinari qui nous fit l'honneur de sa présence. Il parcourt la planète ! mais ne manque pas de nous adresser régulièrement de petits signes amicaux, mêlés à des pensées profondes.

En 2006, retour à l'Ecole Normale Supérieure, pour le Pr Didier Chiche qui enseigne à Kôbe, mais qui fut lui aussi pensionnaire du *Cloître de la Rue d'Ulm*, avec une conférence qui depuis fait référence: *Présence de Romain Rolland au Japon*. Et vous étiez venue, Chère Présidente, accompagnée d'amis de Kyôto. Un concert Beethoven donné par Ikuko et Pierre Ivanovitch clôturait cette belle soirée.

Vous avez reçu ma fille Anne-Laure et son mari Olivier en 2007. Ils gardent, bien sûr, un souvenir inoubliable de votre accueil, et dans un texte paru dans les *Cahiers de Brèves*, Anne-Laure exprimait son émotion d'avoir retrouvé à 9000 kilomètres de son petit pays, la présence si forte, si aimée, de Romain Rolland.

Toujours en 2007, vous me donniez l'occasion de rencontrer à l'Opéra de Paris, le Maitre Masatarô Imafuji qui se produisait dans un spectacle Kabuki. Mais je reparlerai plus loin de ce grand musicien.

Pour nos *Journées Internationales* de 2008: *Romain Rolland une œuvre de paix*, nous avons



スイス・レマン湖畔のロラン邸ヴィラ・オルガで語り合う

ユニテ 第四十四号

発行日 二〇一七年六月一五日

発行者 一般財団法人

ロマン・ロラン研究所
理事長 西成勝好

京都市左京区銀閣寺前町三二

電話・FAX

(〇七五) 七七一―三二八一

郵便番号 六〇六一八四〇七

郵便振替振込口座番号

〇一〇五〇―九一五九九九六

印刷所 (株)北斗プリント社

URL <http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/>
E-mail rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp

U N I T É

Sommaire

Appréhender le monde actuel à travers le dialogue entre Romain Rolland et Gandhi
—entretien avec Tetsuo Yamaori, personnalité représentative des sciences des religions
au Japon Tetsuo YAMAORI, entretien encadré par Yô HAMADA

Concert organisé à l'occasion du 150ème anniversaire de la naissance
de Romain Rolland et du
45ème anniversaire de la fondation de l'Institut Romain Rolland de Kyoto:
«Beethoven revisité par la fusion d'instruments occidentaux et orientaux:
guitare, koto, violon et clavecin»

Mot du président de l'Institut Romain Rolland Katsuyoshi NISHINARI

Romain Rolland et Beethoven Akio KIYOHARA

A propos des œuvres choisies Masanobu NISHIGAKI, Akio KIYOHARA

Message de Madame Martine Liégeois, présidente de l'Association des Amis
de Romain Rolland traduit par Yukiko CHICHE

Romain Rolland et Beethoven
—hommage rendu à l'occasion du centenaire de la mort de Beethoven Kōichi UEMATSU

A la mémoire de mon père Soyoko MORIMOTO

Nouvelles de l'Institut Romain Rolland

Nouvelles des membres

Faire-part de décès

Activités et objectifs de l'Institut Romain Rolland

Annuaire 2016 des membres et donateurs

Donation de livres

Postface

Compte-rendu des séances de lecture

Message original de Madame Martine Liégeois